

都留文科大学 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 機関誌  
[フィールド・ノート] no. 76 / 2013 / Mar.

# FIELD NOTE

no. 76 Mar.



10周年企画 最終回

## 読者交流会

—読み手・書き手の視点から見えるもの—

特集

# 継

—つぐ—

お稲荷さんを祀る人 社をつくる人

小野神楽から広がる輪

小さな畑から

いままでと、これからのこと



アパートの庭で

オオイヌノフグリを見つけました。

新たな季節の訪れは

気温や暦だけでなく

目に見えるものからも

分かるのだと嬉しくなります。

# FIELD・NOTE

2013 Mar. no.76  
contents

特集

## 継

—つぐ—

04

06 お稲荷さんを祀る人、社をつくる人

10 小野神楽から広がる輪

12 小さな畑から  
いままでと、これからのこと

16 おわりに

17 フィールド暦

18 はるちゃんの都留生きもの図鑑 第3弾  
～冬を生きるテントウムシ～

20 都留市の旧5町村を巡る (4) 旧谷村町  
おしらさん  
—戸沢地区からみる都留市の養蚕—

22 通学路を歩く

24 10周年企画 最終回  
読者交流会  
—読み手・書き手の視点から見えるもの—

28 待つことをとらえなおす経験

32 歩数から見えるもの

34 ひろいもの 番外編

36 バスという場所

38 ギャラリー・喫茶 英

40 大学のなんでも屋さん

42 起き上がる朝 第6回 —広がってゆくもの—

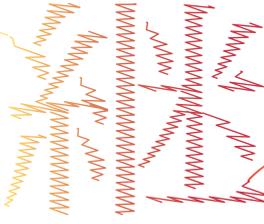
44 Field・Note News

46 編集後記



表紙写真撮影：平井のぞ実  
「夕暮れ空に広がる枝木」  
都留市川棚の坂道にて撮影

『フィールド・ノート』では「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの著書『ウォールデン 森の生活』の初版本扉に、ソローの妹ソフィアが描いたものです。ロゴにそえられている「Grow Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。バックナンバーは都留文科大学コミュニケーションホール地下1階の地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。



— つ ぐ —

春は入れ替わりの季節です。

出ていく人もいれば、入ってくる人もいます。

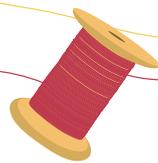
『フィールド・ノート』も、10周年という節目を迎えました。

次へ向けて、何かを託していきたい

それを受けて、新しいものを生み出していきたい

こんな想いから、私たちは「継ぐ」行為について考えてみることにしました。

その行為にはどんな意味があるのでしょうか。

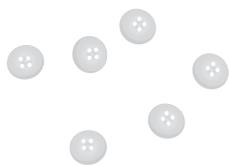


地域のなかで古くから続くもの、人びとが続けているものは  
どうしてこれまで継がれてきたのでしょうか。

継がれたものはこれからどうなっていくのでしょうか。

継いできた人の想いや、継がれてきたものにふれながら

「継ぐ」ことの意味を探っていきます。





太田さん家のお稲荷さん。真っ赤な社と両脇のきつねが印象的

# お稲荷さんをまつ祀る人 社をつくる人

文大通りに沿うようなかたちで細い道がある。周辺はアパートが密集しており、学生がよく歩いている道だ。水道橋（通称、ピーヤ）へと入る脇道を通り過ぎてさらに元坂を行くと、道に面した民家の庭に小さな社があった。社を祀る人、そして偶然知った社をつくる人にお話を聞いて、私なりに「継ぐ」ことについて想いをめぐらせてみる。

藤森美紀（社会学科4年）＝文・写真

## お稲荷さん

いつ気づいたのかすっかり忘れてしまったけれど、民家の庭の端にある古びたその社は何なのだろうと思っていた。石でできた台座の上に赤い社。屋根と台座を除いた部分は木でできていて、のぞきこんでみると二匹の白い狐が扉の両脇に静かにたたずんでいる。まるで何かを守っているかのようだ。扉のなかには何があるのだろうか。いや、何もないのだろうか。神様がいると考えると簡単には扉のなかを知ってはいけない気がする。のちに私はその社がお稲荷さんであると知った。

民家の向かいにある建設会社の事務所を訪ねると、活力のあるおぼちゃんといった印象の太田さんがお稲荷さんについてお話をしてくださった。お稲荷さんは、本家に当たる家が先祖代々祀っているもので、家を建てないとつくれないものだそうだ。社の扉のなかには、「おたま石」が入っているという。おたま石は魂を表すものだそうで、その家で守り受け継いできた大切なもの

であることがうかがえる。扉の外にたずむ二匹の狐はそのおたま石を守っているのだ。太田さんの家では、それまで神棚で祀っていたおたま石を40年前に外に出したという。

うちよりも大きなお稲荷さんを祀っている家があるから、と太田さんに紹介していただき、堀内花代さん（66）にもお話をうかがうことができた。堀内さんは国道139号線沿いにある堀建トヨー住器（堀内建材店）を営んでいらつしやるかたで、会社の敷地内には立派なお稲荷さんを祀っている。じつは以前から、なぜこんなところに立派な鳥居が、と思っていた。まさかお稲荷さんだったとは。私の抱いていた「なんだろう」がこのようなかたち



堀内さん家のお稲荷さん。お線香をあげさせてもらったりお酒がお供えされている



初午祭からの帰り道に見つけた大きなお稲荷さん。しっかりと鳥居がある。五色の幡が奉納されて、何人も人の名前が刻まれている

で繋がるとは思ってもみなかった。堀内さんの家のお稲荷さんは豊川稲荷を勧請したもので、家を建ててから2、3年後、友人の勧めで祀ったそうだ。30年前に今の立派な社になり、それまではまだ小さかったという。太田さんの家のように神棚から外に移したわけではなく、最初から外で祀っていたそうだ。扉のなかにあるものもおたま石ではなく、狐にまたがった神様のつかいだという。お正月に、木の箱に入れた神様の使いを持って愛知の豊川閣を訪れ、お経を唱えてもらうそうだ。そうすることで魂を入れるという。かたちは違えど、魂を祀るといふ部分は各家で共通しているのだろうか。堀内さんは、祀った以上ちゃん

と先祖代々受け継いでいかなければいけないとおっしゃっていた。ちゃんと祀ればいろんなお願い事を聞いてくれる。堀内さんのお孫さんは夜泣きがひどく、どうしても泣いて困るときには名前と住所を言い、油揚げをお供えして泣かないようにとお願ひするそうだ。そうするとそのときは本当に泣かないで大人しくしているという。そして、必ずお礼をするそう。おろそかにすれば悪いほうに動くこともあるという。

初午祭とお稲荷さん

太田さんによると各家によってお寺や、祈願の仕方が違うが、二月の初午の日にお稲荷さんのお祝ひをするのだそうだ。都留市郷土研究会の会長である内藤恭義さんにも初午祭のことをお聞きしたところ、緑、黄、赤、白、青の五色の紙でつくった幡を奉納して祈願するのが習わしだと知った。

2月9日に西涼寺の儀秀稲荷で行われた初午祭に行った。行ってみたいはい



円通院付近で見つけた。社は屋根から台座まですべて石でできている

いものどうしていいかわからない。本堂の右脇から人が歩いてくるので行ってみることにした。儀秀稲荷社と書かれた石碑の横に階段があり、それを登ると鳥居と社があった。社の左側には奉納された五色の幡がガサガサと音を立てながら風に揺れている。お賽銭を入れて神社に参拝するのと同じように手を合わせた。しかし、参拝に来ていたご婦人にお話を聞くと、お願ひをするのではなく、日ごろの感謝をするのよと言われ、少し恥ずかしい気持ちになった。



初午祭からの帰り道、西涼寺から円通院、長安寺、谷村工業高校の裏門へと続く道のりのなかでいくつものお稲



湯呑みが置いてあるものの、扉のなかには何もなかった。狐もいない

荷さんを発見した。ひとつは、家庭で祀るにはかなり大きなもので、一族で建てたものなのか、地域で建てたものなのかはつきりわからなかった。格子状の扉が閉められていたが、なかをのぞくとちゃんと狐がいる。その通りを通っても今まであまり気がつかなかったのに、その日だけで八つものお稲荷さんを見つけたのだった。家と家の細い路地の向こうで、庭の端や角で、ひっそりと、どこか神聖な雰囲気漂わせているお稲荷さん。すべて石でできた社も見つけた。そして、開いた扉の奥に何も無い、社だけのお稲荷さんもあった。昔はそこに神様がいたのだろうか。古びた社だけが残されているその光景はどこか寂しいものだった。

## 社をつくる人

夜、ガラス張りの窓の向こうに並んでいる社が目を引き。アルバイトからの帰り道、そこを通るたびについ視線がいく佐藤木工。社をつくる人が身近になると知ったとき、どんな人が、どういう想いで社をつくるのかお聞きしたいと思った。先祖代々お稲荷さんを祀る人もいれば、その社をつくる人もいるのだ。

佐藤木工は鹿留交差点のすぐそばにある。ガラス窓の隣にある引き戸を開けると、佐藤恵一郎さん(45)が迎えてくださり、奥のほうから佐藤さんのお母さんも出てきてくださった。木の机に、木の椅子。置かれた筆筒は重厚感を、並んだ社は優しい木の色をそのままに、屋根が光を反射して存在感を放っている。お話を聞かせていただいたその部屋は、手づくりの「木」に囲まれていた。

佐藤さんは佐藤木工三代目。小さいころから木に触れ、ごく自然な流れの

なかでこの仕事を継いだという。だから技術についても「教えてもらうという感覚があまりないんですけどね」と佐藤さん。お父さんの代には職人さんが何人かいて、その技を見て自分で覚えてたそう。

「みんなそうだと思いますよ、この世界は」。「教えてもらうんじゃなくて覚えるといった方が正しいですね」。

わからないことは自分で勉強し、修理をするときにはその当時の職人さんの隠された技術を学ぶ。人はきつと見様見真似でたいいていことはできず、そこから自分で工夫して上達していくことができるのだ。けれど、教えられる勉強に慣れきつてしまえば、それがまるで当たり前のようになってしまうとあらためて考えさせられた。

私が見つけたお稲荷さんはほとんどが木でできた社だったけれど、なかには石でできたものもあった。木でつくるといふことの意味をお聞きすると、「石ってやつぱり絶対的なもので、変

化がないですよ」と答えてくださいました。お稲荷さんなどの「屋敷神さん」は、代々受け継がれてきたものを古くなるたびに少しずつ大きくしていき、それが家の繁栄を願う習わしだそうです。木はやがて朽ちる。その変化について、朽ちていくさまを愛でる文化が日本にはあるとおっしゃっていた。

### 佐藤さんの仕事

佐藤さんはいただいた仕事以上のものを提供するという想いを一貫してもつておられる。「強いて言えばちよつとこう、理屈っぽくなるけど、精神性ですかね」。強い気持ち、心構え、気持ちを進めるといった精神的なことを大切にしている。やはり佐藤さんはその道のプロであり、職人としての誇りと人間としての芯があると感じた。佐藤さんのつくる社や家具が重厚感や存在感を放つのは、その想い

が染み出ているからなのだろう。木に対する愛着とその知識の深さを、置いてある作品やお話の端々から感じた。一本の無垢のケヤキの木から木目をいかに美しく表現できるか、それが佐藤木工の仕事だとおっしゃる。今、そこまでこだわってできているものが少ないそう。



窓から社が見える。  
さまざまなかたちの木がたくさん置かれている



右：扉や引き出しの木目が左右対称であるかのようにそろえてある  
左：木の優しい色とびかびかの屋根。赤色ではなくても目を引く

いまだに手作業でなければできないこともある。そういうものは手間暇がすぐかかり、採算がとれないからみんなやらないという。「でも、それ

やっちゃうと今度は、できる人がいなくなっちゃうているのよ、今。だって継承されてないから」。そうして技術

は継承されず、廃れていく。そういう価値をわかる人が少なくなり、そこに

価値を見出す人がいなくなったのだとおっしゃる。「それが恐ろしいことだなあと。このままじゃつくれる人いなくなっちゃういますよ」。佐藤さんはこ

ういった現状に憤りを感じているようだった。それでも「まあ、そうはいっても日本人……日本の文化は廃れない

んじゃないかなとは少し思ってますけどね」とどこか希望を抱いているようでもあった。

### 「継ぐ」と「つぐ」

お稲荷さんは農業の神様だと聞いたことがあったけれど、どうやらそれ

だけではなかった。太田さんも堀内さんもお稲荷さんは家内安全・商売繁盛を願うものであるとおっしゃっていた。堀内さんご先祖様を一緒に

に祀ることはできるけど、神様でも仏様でもないとおっしゃる。内藤さん

にお話を聞いたときには、屋敷神さんとしてお稲荷さんを祀るのだと教えていただいた。それならば、ど

れが本当なのだろう。そう思って答えを見つつけようとしていたけれど、きつ

とどれも本当なのだ。信仰は人の心のなかにあるものだし、人から人へと変化を遂げながら伝えられていくものなのだから。

その変化のなかで不変なものが、継ぎ、継がれていく芯の部分なのだろう。どうして継いできたのか、大切にしてい

ていきたいのか、それは受け取る人によつて違うかもしれないけれど、継いできたという事実がその目に見えない

ものを表しているような気がする。古びた社だけが残された光景を寂しいと

感じたのは、そこにあるべき人の心がなかったからなのかもしれない。お稲荷さんは人々の心がかたちになったものなのだ。

そして、職人さんが技術やその精神を受け継いでいくことも同じだ。佐藤

さんが自然な流れのなかで仕事を継いだのは、佐藤さんのお父さんや、ほかの職人さんたちが言葉にしなくても、

ものをつくる姿から佐藤さんが受け取った目に見えないものがあるからだろう。それでも、ものをつくるうえで

大切にしたいのは佐藤さんのお父さんたちと変わらないのだと思う。だから佐藤さんがつくるものは、佐藤さんが受け継いできた技術、知識、精神が

たちになったものだ。お稲荷さんを祀ること、職人として納得のいくものづくりをすること

は、先代の大切にしてきた想いを受け取り、その想いをかたちにしていくことなのだ。



小野神楽の練習風景。夜8時～9時まで中小野公民館で練習している  
(2005年撮影 写真提供=武井邦夫さん)

都留市の郷土芸能に神楽がある。神楽のことをよく知らなかった私はいまひとつイメージができなかった。さっそく『都留市史 通史編』を調べると、「都留市の祭りを特徴づける基本的な要素」という気になる一文を発見。その神楽を今でも活発におこなっている地域のひとつが小野だ。

前澤志依（国文学科3年）=文・写真

## 小野神楽から 広がる輪

あ

んまりうまく話せないんだけど、と照れ笑いをしながら開口一番にそう

おっしゃるのは、小野神楽保存会、代表の武井邦夫さん（69）。武井さんはガツシリとした体つきで、小野神楽に関して一言ひと

に熱意をこめて話されるからだ。2月6日、本学最寄りの喫茶店「バンカム・ツル」で小

野神楽保存会についてお話をうかがう。小野は、本学側からみて鍛冶屋坂トンネルを越えたところに広がる地域だ。もともと小

野神楽保存会は30年前からあるのだが、時の流れとともに、年々参加者が減っていった。

これで終わるのはもつたない、と思つた武井さんたちは、もう一度、小野神楽を活気づ

けるために、平成17年に有志を募つて保存会を再結成した。それから、神楽を長年やって

きた80代の方々に指導をお願いした。彼らのことを会員の方々は「師匠」と呼んでいる。

同じ年に小野熊野神社でおこなわれた大祭りで、再結成をしてから初めて小野神楽を披露した。そのときは300人近くの人が見に

来たという。また、大祭り以外でも小野神楽を披露する機会を増やしていった。介護施設

で披露したときは、施設にいたみなさんが、

涙を流しながら見入っていたとのこと。「きつと懐かしかったんだらうね。あのとき、あ、やってよかつたってやりがいを感じた」。武井さんは誇らしげな表情でおっしゃる。

「心の文化財」

神楽は男性がやるものだといわれているが、小野神楽は老若男女問わず参加している。

「乳のみ子から子ども、次の世代を包み込みながらやっていけば、より豊かな保存会になると思うんだよね」と武井さん。保存会の人

たちはみんな、家族のように温かい絆で結ばれている、と胸を張つて武井さんはおっしゃる。誰でも受け入れてくれる人たちがいるからこそ、参加しやすい環境が築き上げられていくのだろう。

お話のなかで、武井さんが2月末で代表を交代することがわかった。小野神楽保存会を

自分のことのように話す武井さんの姿を見て、これからも武井さんが引つ張つていくの

だろうと思つていた私は驚いた。「自分が構想していたことはやりきつたから、そろそろ

次につなげるために交代しようかと思つて」。これからは裏で支えていきたいと付け足す武



### 小野神楽とは

おもに小野で4月の春祭り(大祭り)と9月の秋祭り(大祭り)に舞われる神楽のこと。神楽とは、収穫の秋に、五穀豊穡のお祝いで神様に感謝して、笛の音に合わせて舞いを踊り、太鼓を叩き、歌をうたうこと。都留市で神楽といえば獅子をかぶって舞う神楽(獅子神楽)のことをさす。小野神楽保存会の方々によると、小野の神楽は力強い舞いを踊るそう。

井さんは、寂しさと次へつなげられる安心感が混ざり合った表情をしていた。活気づいてきた保存会を、次の世代へ引き継ぐことで、さらに続けてほしいというのが武井さんの願いだ。その願いの源はどこにあるのだろうか。

2月16日、小野神楽保存会の新年会にお邪魔した。そこで、武井さんを含む7名の会員の方々に、どうして小野神楽を続けているのかを質問したところ、「子どものころから思い入れがあるから」との答えが返ってきた。さらに、慣れ親しんできた郷土芸能だから子どもにも伝えたいと語る。

現在は子ども参加者はそれほど多くなく、あまり興味をもってもらえないという悩みがある。小さい子どもは、獅子の顔を怖がってあまり近づこうとしない。そこで、本学で毎年5月に催される「つる子どもまつり」などの行事に積極的に参加し、小野神楽に興味をもってもらおうと活動をしている。

「小野神楽が国や県の文化財にならなくても、小野や小野に暮らす人たちの心に残ってくれればいいと思ってんだ」

そう語る武井さんは、小野神楽のことを「心の文化財」と例えていた。

郷土芸能は、見て、体験をして記憶に残るもので、伝えようと意識して伝えなければ途絶えてしまうものでもある。聞けば、小野で神楽をやるようになった時代はよくわかっていないという(『都留市史 通史編』によれば、江戸時代にはすでに祭祀のときに舞われていた。遠い昔におこった文化を、今を生きる人たちがつなぎとめている。それをまた次へとつなぐことで、古くから根付いてきたその土地ならではの伝統が生き続ける。

武井さんによると、大祭りでは神楽が披露されるだけでなく、地域の方々が中心となって出店(でみせ)を開き、訪れた人々を楽しませてくれるという。地域全体で小野神楽を盛り上げている。武井さんをはじめ、小野神楽保存会



小野熊野神社の入口。9月9日にここで大祭り(秋祭り)がおこなわれる(2013.02.15)

の方々に会って、小野の人たちが小野神楽にたいして、熱い思いを抱いていることを知った。小野神楽は、昔から引き継がれてきた、伝統ある芸能だから、という理由だけで受け継がれているのではない。小野神楽をきつかけにして、小野に暮らす人々を一人ひとりつないでくれる役割もあるのだ。

それに、継がれていくことで「小野といえば昔から神楽がある」と、その土地の特徴にもなる。小野を離れても、神楽が小野のことを思い出させてくれる。世代をこえて共通の話題をつくることもできる。だから小野の人たちは、小野神楽の伝統が途絶えることを「もつたいたい」と思うし、子どものころからの強い思い入れがあるのだろう。そういう思いを知った今では、私も小野神楽がこれからも続いていってほしいと願うひとりだ。

次に小野神楽が披露されるのは、4月の第2日曜日に、中小野の蚕影(こかげ)神社でおこなわれる春祭りのとき。雪解けの合図に合わせて、祭囃子の音が聞こえる季節はすぐそこだ。

#### 【参考文献】

『都留市史 通史編』  
都留市史編纂委員会／1996年

# 小さな畑から

いままでと、これからのこと

2012年春、本学から歩いて20分ほどの十日市場にある中屋敷フィールドで、小さな畑を拓いて畑しごとを始めました。なんとなく始めた畑しごとは私にとってどんなものだったのか、小さな畑は来年からどうなっていくのか、少しずつ考えています。

持田睦乃（社会学科4年）=文・写真



2012年6月4日



2012年3月20日

8月

唐辛子をひとつ収穫した。  
畑に行く道中、（おそろく）マムシの幼体を発見した。よくわからなかったが、威嚇していたらしい。池ではミズカマキリを発見。砂田が写真を撮っていた。夕方はブヨが多くてだめだ。  
（持田・8月19日）

7月

池が広がっているらしく、気づかずに歩いていたら盛大に足がはまった。どろどろになった。あまりに盛大にはまって、なんだかめんどろになって、靴をはいたままホースから出ている水で足を洗った。皮肉だがあまりの暑さですぐに乾いた。  
（持田・7月28日）

6月

下の畑にはスイカを植えた。そして柵作り。池には卵を背負ったコオイムシがいた。トンボ（イトトンボ、ヤンマ丞）が池に来ていた。オニグルミの雄花が咲いていた。  
（砂田・5月24日）

4月 3月

開墾、石灰まき  
ジャガイモ植え、うねづくり  
（3月20日）  
（4月4日）



中屋敷ノートから  
抜粋（記録者・日付）

の一年間、中屋敷に通って見つけたものの、やったことについて「中屋敷ノート」という一冊のノートに書き出すようになっていました。ページは少ししか埋まっていま  
せんが、読み返すと当時の発見や記憶が思い  
出され、なんだかわくわくします。  
最初に畑の上を覆っていた枯草をどけたこ  
とから、野菜の種まき、新しい畑を広げた時  
のこと。淡々とした記録の時もあれば、焦り  
や疲れ、発見の感動がそのまま書いてある時  
もあります。初めは畑のことばかりが書いて  
ありますが、少しずつまわりのいきものにも  
目が向くようになっていきます。ニジユウヤホ  
シテントウ（本誌73号参照）がジャガイモの  
葉につき始めたころから、コオイムシを見つ  
けた、シカやイノシシが畑に入るようになって  
きた、サルとばつたり遭遇した……。畑し  
ごとだけでなく、いきものの観察にも時間を  
かけるようになっていきました。  
またこのノートから、集中して畑に通って  
いる期間と、そうでない期間があることがわ  
かります。春から夏にかけては間を置かず通  
えています。夏が終わりに秋に入ると通う回  
数がぐつと減り、10、11月はノートに記録が



2013年2月3日



2013年1月17日

2月

1月

12月

11月

10月

9月

午前9時45分、柄杓流川にかかる橋で見知らぬおじさんと会う。  
橋のたもとまでは、もう車のタイヤ跡がたかさんついていた。うーん、なんていうか、春。地面もふかふか。(持田・2月3日)

午前8時頃から雪の中ずんずん進んでいった。雪は表面が凍ってしまい、固くなっていった。動物の足跡をさがしたが、昨日見たものと合わせて4ヶ所くらいだった。ノウサギのフンを、いくつも見つけた。  
(持田・1月16日)

持田と畑の片付けへ、全体を耕してなっしておいた。ハシバミの雄花の冬芽は特徴的だった。  
(砂田・12月8日)

間引いて植え替えなかった大根6つを収穫した。15〜20cmくらいまで太くなり始めていて、根自体には虫喰いもなく、成長は順調であるように思えた。イノシシに掘り返されていたうねを直し、柵もできる範囲で修復しておいた。ヒガンバナが咲き始めている。もう秋だなあ。(持田・9月26日)

残っていません。時間がなかった、というよ  
うな理由もいくつかありますが、「今日くら  
い行かなくてもいいか」と思った日が続いて  
いたこともあり。畑での大きな収穫を求  
めていたわけではなかった。なおさらそ  
ういう気持ちが強かったのかもしれない。  
それでも、季節の変わり目や、山々のようす  
がガラッとさま変わりするころになると、私  
の足は自然に中屋敷に向かいます。  
一年かけて通い続けることで、私にとって  
中屋敷は「畑のある場所」というより、「わ  
くわくするようなことを探しに行く場所」に  
なっていきました。なにか見つけたら、ノー  
トに残しておく。みんながノートを見たら、  
私の話を聞いたらなんて思うだろう。自分の  
なかで少しずつ、楽しめかたが変わっていく  
のが分かりました。  
中屋敷に足を向けても、このノートに何も  
書かなかった日がありました。突然思  
い立って草むしりに行ったことや、なんと  
なく歩きに行った日のことは書いていないこと  
が多く、写真は残っていてもノートには何も  
残っていない、ということが頻繁に起こって  
います。なにも発見がなかったからなのか、

## いままでのこと

2012年3月～2013年2月のこと

畑へ通うこの道沿いのクワの木には、たくさんの甘い実がつけました。ウメジャム(本誌74号参照)と同じところに、クワの実でもジャムを作りました。



クワの実をとる香西さんと砂田くん

メダカが泳ぎ、トンボが飛び交う池です。暖かい時期にはここヘシカなどが訪れていました。2月28日、川から水を引くホースの具合が良くないようで池は干上がっていました。池の底には動物の足跡が。何を目的にここへ来たのか、不思議でなりません。



池についていた足跡。ひとつひとつ、くっきりと残っている



収穫した夏野菜



2つ目の畑を耕す砂田くん

6月に拓いた2つ目の畑ですが、砂田くんと私だけでは手が回らなくなってしまったため、9月17日に土をならし、この畑での作物づくりをやめることになってしまいました。寂しさはありましたが、中途半端にしないためにも必要なことだったと感じています。

とくに重要なことだとも思えなかったのか、書かなかった理由はその時々によって異なっていたような気がします。

ノートを書き始めたのは、中屋敷のようすをみんなで見られるようにしよう、という理由からでした。その場では小さなことに思える作業、時間や気温も、記録が残っていれば、他の人がいつか畑仕事をするときに役に立つことがあるかもしれないからです。そう考えるとやっぱり、「もつと細かく書いておけばよかったなあ」と思ってしまうのです。

冬が訪れて、畑での収穫物がなくなるころになってやつと、次の年のことについて考え出せるようになりました。そうしたときに、ノートの記録の大切さを思い知ったのです。

畑を拓いたばかりのころ、私は「1年かぎりの畑でもいい」と思っていました。それでも通い続けていくと、拓いた畑に対する、小さな責任感が芽生え始めたのです。「中屋敷の畑は山が近いから、動物の食べものになるような野菜は育てないほうがいいな、じゃあどんなものを育てるのに向いているのかな」

## これからのこと

2013年3月からの、未来予想図

来年の畑はどうなるのか、育てる候補に上がっている藍と紅花が大きく育つ6月ごろを想像しながら、未来予想図を描いてみました。畑はもちろん、まわりのいきものようすも気になるところです。

藍と紅花は、遠藤静江さん(本号42頁「起き上がる朝」に登場)から種をいただくことになっています。



と、春からは自分が通うことのなくなる畑のことが、気になって仕方ありません。

そこで、編集部の後輩に「中屋敷の畑を継いでくれる人、いませんか？」と何度か声をかけ、来年からの「畑の主」を募りました。手を挙げてくれたのは二人。畑では染め物の染料として使う藍と紅花を育ててみたい、ということでした。経験がないことをやってみたいと思う人もいれば、作物の収穫やそれを使ったものづくりを目的に畑しごとをする人もいます。私が教えてあげられることはとても少ないのですが、新しい季節をこの畑と過ごす人たちが、自分なりの楽しみを見つけてくれることを願うばかりです。

私はいままで、自分が見つけたもの・感じたことを人に伝えることで精一杯だったけれど、いまは同じ場所で他の人が何を、何を思うのか、ということにすごく興味があります。そのため、ノートにどんなことが書かれています。とても気になります。新しい季節に、中屋敷はどう変わっていくのか。ノートはどんな言葉で埋まっていくのか。この土地を離れる日が近づいても、中屋敷への興味は尽きません。

## おわりに

取材や今までの経験の振り返りを重ねることで、  
私たちのなかで「継ぐ」ことの認識が変わっていきました。

「継ぐ」ことは、あまり労力を使わずにできると思っていました。  
けれど、本当はそうではありませんでした。

「継ぐ」には、人によってさまざまな想いや経緯があったのです。  
信仰に対する責任、幼い頃から生活のなかにあった職人の姿、  
残していきたい文化、その過程で生まれる世代を越えた地域の繋がり、  
同じ場所で違う人が何を見ていくのかという期待。  
じっさいは、託す人、託される人、ともに働きかけなければ成り立たないものでした。

そう考えると、「継ぐ」ということはとてもかけがえのないものだ気がつきます。

自分が何かを残したいと思うこと  
同じものに価値を見出す相手がいること  
お互いの想いが交わったときに初めて「継ぐ」ことができます。

だからこそ、私たちにとっての「継ぐ」は、  
かたちとしてではなく  
自分と相手の想いを伝え合って続いていくものであってほしいと思うのです。



# フィールド暦

2013.1-3

本学フィールド・ミュージアム=文・写真

毎年同じ時期に同じ場所を歩くと、馴染みの生きものたちに出会えます。そのいっぽう、まれにしか見かけない生きものもいます。そんな発見が楽しくて、日々、フィールドに出掛けます。



カヤネズミの巣  
2013年1月9日 都留市十日市場  
周辺を道路と水田に囲まれた、面積600㎡ほどの草原にあった巣です。このほかに、もう1巣見つかりました。



ウメの花  
2013年2月5日 都留市十日市場  
果樹園のウメの花が咲きました。この日は8輪しか咲いていませんでしたが、花の数が増えたとメジロが蜜を吸いにやって来ます。



サルがかじった跡  
2013年3月2日 都留市十日市場  
サルがクワの樹皮をかじった跡で、冬から春先によく見られます。



クマタカ  
2013年2月5日 都留市十日市場  
ハシトガラス（上の2羽）に追い掛けられているクマタカです。カラスなどが猛禽類に攻撃をするふりをしたり、じっさいに攻撃をしたりすることをモビングといいます。

## 大学の裏山に設置したセンサーカメラ（赤外線カメラ）の写真



タヌキ 2013年1月2日  
タヌキはセンサーカメラによく写る動物です。秋から冬にかけては行動が活発になるようです。



ニホンジカ 2013年1月11日  
裏山には数年前からニホンジカが生息しており、いまでは鳴き声もしばしば聞かれます。



ノウサギ 2013年1月14日  
都留市のノウサギは冬も茶色です。冬に白いノウサギを観察されたかたは、編集部までお知らせください。



シロハラ 2013年1月30日 (左)  
ガビチョウ 2013年2月2日 (右)  
この2種は、同じ側溝で撮影されました。鳥類だけではなく、タヌキやネコもこの側溝を利用しています。





自然科学棟の西側外階段の隅に集まるナミテントウ (2013.1.11)

「テントウムシは漢字で書くと“天道虫”小学生のころに、先生が教えてくれた。植物の茎を上へ上へとつたい、てっぺんから飛び立つ、天への道を知る虫なのだ——。

本学の自然科学棟は、毎年テントウムシたちの越冬場所になっているらしい。わざわざ探しに行かなくても見られる。しかも大量に集まってくるなんて、これはテントウムシをよく知るチャンスだ。

鈴木陽花 (初等教育学科3年) =文・写真・イラスト

### 群れて冬越し

岩の割れ目や落ち葉の下にいるたくさんさんのナミテントウ。黒いものや赤いもの、翅の紋の数もさまざま。図鑑などでよく目にしてきた光景を思い出す。ナミテントウは、集団で越冬するテントウムシとして知られている。あんなにたくさん、どうして同じ場所に集まってくるのだろうか。なんで群れるのだろうか。子どものころから疑問は尽きなかった。10月下旬の秋晴れの日。自然科学棟の下で少し顔を上げてあたりを見まわす。黒やオレンジ色の小さな虫が数匹飛んでいる。うわきは本当だったようだ。棟の西側外階段で、集団がつくられる過程を毎日観察していくことにした。

飛んできたナミテントウたちは、1匹で歩きまわったり、とまったりしていた。どうやら群れるには時間がかかるみたいだ。数匹が寄り添ってじっとしているのを確認したのは、やっと一週間が過ぎた11月初旬からだ。この2〜4匹ほどの小さな集団が大集団になっていくなんて、集まるきっかけはいつたい何なのだろう。

### 単独で冬越し

一度群れたナミテントウは移動せずに、そこにじっとしているものだと思っていた。新しいナミテントウが次々とやって来て、大集団になる。そういうものだろうと思って観察していた。でも、じつさいに見ていると、意外にも歩きまわっているナミテントウが多いことに気づく。ほとんど毎日取りためた観察の記録からは、おもしろいことが見えてきた。集まることと離れることをくり返しながら、集団はだんだんと大きくなっていったのだ。気温が低いと集団は大きくなり、気温が高いと小さくなる。また、雨が降ると集団が小さくなる傾向も見られた。環境に対応して、あるいは影響を受けて行動しているとすれば驚きだ。

野外でも越冬している集団はいないかと、木の幹を見てまわっていた。ふと目をとめると、4mmほどの小さなテントウムシがとまっている。見慣れた赤い2つの紋と黒い体色から、ナミテントウだと思った。ふだん見ているものに比べたら、たった2分の1ほどの大きさだ。こんなに小さいのが1匹で越冬して



いるなんて、なんだか心許ないと感じる。

数日後、また同じような大きさのナミテントウが1匹で越冬しているのを発見。よく見ると胸の部分が真っ黒だ。これは違うテントウムシなのではないかと思ひ、はつとする(ナミテントウは胸の部分のふちが白い)。図鑑で調べると、やはりナミテントウではなく「ヒメアカホシテントウ」のようだ。

今までは、群れることが特別なことのように思っていた。でも、逆に1匹で越冬している姿を目にすると、群れないことにも何か理由があるのだろうかと思う。ひよつとすると、小さくてもナミテントウより寒さや乾燥に強いかもしれない。見た目以上にたくましい力が備わっているのではと想像するだけでも、目の前の小さな命に感動せずにはいられない。

\* \* \*

厳しい自然のなかで生き抜くための工夫は、想像以上に複雑で精巧なものだ。わきあがった疑問に向き合ってみても、簡単に分かることは少ない。それでも自分の力で疑問を明らかにしようとすることは楽しい。これからもテントウムシを追い続けていきたい。

## テントウムシ、いろいろ

テントウムシにもいろいろいる。日本に生息するテントウムシの中でも大型のカメノコテントウ。体長 13mm (上段左) / 集団で越冬するナミテントウ (上段中央) / 5月に中屋敷の畑で見つけたニジュウヤホシテントウ (下段左) / よく見かけるナナホシテントウ。この冬は見つけられなかった (下段中央) / 今までナミテントウだと思い込んでいたヒメアカホシテントウ。体長は4mmと小さい (下段右) ※写真右上のシルエットはじっさいのサイズ



カメノコテントウ 2013.3.2



ナミテントウ 2013.2.7

ヒメアカホシテントウはドーム型の甲殻の縁がカールしていてカメみだ。真っ黒な体は兜のようで頑丈そうに見える。

顕微鏡で見た写真




ニジュウヤホシテントウ 2012.5.23



ナナホシテントウ 2010.5.22



ヒメアカホシテントウ 2013.2.9

資料提供: 志戸岡直希・砂田真宏 (初等教育学科 4年)

これまでに登場した生きものたち



カジカガエル



アカネズミ

都留市の旧5町村を巡る (4) 旧谷村町

# おしらさん

—戸沢地区からみる都留市の養蚕—



上戸沢出身で、下戸沢に嫁いだ正子さん (2013.3.6)

1954年4月29日、旧谷村町、宝村、盛里村、禾生村、東桂村が合併して、都留市が誕生した。「都留市の旧5町村を巡る」では、各地域を渡り歩き、気になる人やモノから、その地の風土を探っていく。

都留にいと、**「養蚕」**の話を目にする事が多い。それほど、生活に密着したものだだろう。ぼやけたままの**「養蚕」**にはっきり向き合いたくなり、旧谷村町戸沢に出かけてきた。

崎田史浩 (社会学科4年) = 文・写真

## 旧

盛里村に、蚕影山があるらしい。そこには、養蚕にまつわる石仏があるようだ。山や石仏から養蚕の跡を追ってみたというのが、今回の取材の出発点だった。それらを探し求め、盛里地区へ向かう道中、旧谷村下戸沢を歩いていたとき、志村正子さん(80)に出会った。

たまたま家の外に出ている正子さんに何気なく養蚕についてお聞きした。「養蚕」がピンとこなかったらしく、繰り返し聞くと、「今はハイカラになってお蚕かいこって言うけれど、ここではお蚕のことをおしらさんおしらさんって言うの」。

続けて、おしらさんの神様のことを「おしらがみさま」と呼び、その石碑が正子さんの家のすぐ裏手の山の入り口にあることを教えてくれた。



おしらがみさまの石碑 (2013.2.16)

一口に「養蚕」と認識していたものが、方言や石碑の存在から、地域ごとの固有性を持つものであることが見えてきた。そこで、蚕影山探訪は中断。「おしらさん」についてさ

らに聞いてみたくなり、幼いころから養蚕に携わっていた正子さんにお話をうかがうことにした。

## 「明かり」を励みに

お嫁に来たころは、毎日夜10時以降まで機織りはたをしていた。そんな話から始まった。「あ、あそこでもまだ織ってるからもうちよつと頑張ろうって」。街灯の少ない時代、ぼんやり見える余所の機場の明かりを見て、毎日遅くまで働いていたそうだ。昭和30〜40年は、機織りの最盛期。「ここらどこの家も機屋になったのよ」と正子さん。その当時は、「がちゃん」と機の音がすれば、「万円」儲かることを意味して、「がちゃん時代」と呼ばれていた。

また、織物の原料となる糸を作りだす養蚕は貴重な現金収入となった。どこの家も蚕の「種」を養蚕組合から毎年50グラム買って、春蚕、夏蚕、秋蚕、晩秋蚕と年に4回の繭づくりをおこなった。100グラムの種を買う家は「お大尽」で、集落に1軒か2軒しかなかったという。食料は田畑で自給自足して賄い、木を売ること収入を得ていた。それ



◀ 鮮やかな紺色が目を引く半纏。ミシンを使って、昔の着物や座布団の生地を再利用している

#### (4) 谷村町

1875年に、上・下谷村が合併し谷村となる。名前の由来は「谷あいの村」。1896年に谷村町となり、1942年には三吉村（法能、玉川、戸沢）と開地村（小野、菅野熊井戸）を吸収合併し、市制後も谷村地区として残る。

以外の生業として、養蚕は家計の支えとなる、日常のまんなかにあるものだったのだ。

#### 子どもの仕事

子どものころから、養蚕と関わり続けたからだろう。正子さんはまるで、昨日のことにように当時のことを口にする。蚕の飼いかたや繭の作りかた、作った糸で織った着物の話など話題は尽きない。そのなかでも、「子どもの仕事」として度々登場する養蚕の思い出が印象深かった。

「子どもだつて、戦時中飴玉なんてないころね、蚕のときはお金がなくても（親が）買って、子どもにくれるわけ。それをもらうのが嬉しくて、一生懸命」。例えば、作られた繭を見てその状態を検品するのは、親の代わりに子どもがする仕事だったそうだ。また、蚕は、ボール紙の箱のなかを碁盤の目のように区切られた升目にひとつずつ入れられていた。それを、「宿る」から「やとう」と呼び、糸を吐ききった蚕の箱を裏返して「つき出す」のも子どもの仕事になっていた。そうして、できあがった繭は売られていくのだ。「お蚕さんって決して怖くない」と正子さ

ん。生きものではあるが、箱に入れてやればそこにちゃんと入っていたからだそう。それに、やり始めれば面白かったとも言。朝から晩まで、ときには夜を徹して家族総出でやってきたのだ。

#### 地域との対話

正子さんが語る養蚕は、仕事というよりも暮らしそのものに感じた。だからこそ、地域固有の扱いかたがあるのだ。しかし、今では正子さんの家では、機織りの道具は処分され、養蚕をおこなうために3階まであった家屋も2階に改築されている。「おしらがみさま」と、願いや祈りを込める風習も、いずれは日常から消えていくのかもしれない。

都留が織物の産地であったことを何度か知る機会があったが、誰かの記憶を通して知る養蚕や織物の話は、追体験となり身に染みってくる。遠い昔の生業だと思っていたものが、つい最近のことに思え、都留で織物を営んでできた人の思い出に触れることで、都留と自分がかつた小さな糸につながった気分になった。

都留の歩みを象徴する養蚕。それを都留の人によって教えてもらい、自分の身近な歴史

や文化として実感を持つ対話のひとつ。そういつた地域と自分との関係づくりが都留での学びとして積み重なっている。正子さんとの出会いから、あらためてその手応えを感じた。



正子さんは、昔織った着物に綿を詰めて新しく半纏はんてんを作っている。着てくれる人に喜んでもらいたい、そう話す正子さんの気持ちに触れて、養蚕が今もまだ生き続けているように思えた。

連綿としたつながりは、すぐには見えてこない。けれど、こうした出会いを通して、名前や形を変えても「おしらさん」は実感を伴って私たちのそばにあり続ける。そう思うと、身近な地域でこれからも人やモノと対話し続けていきたいと強く願うのだ。

都留市の旧5町村



# 通学路を歩く

生まれも育ちも山梨県富士吉田市のわたしは、自宅から車で30分かけて大学まで通学していた。しかし、いつも時間に追われ、景色をゆっくり見ている余裕なんてなかった。卒業してしまいう前に一度自分の足で歩いてみよう、大学生生活締めくくりの旅に出ることにした。

小佐野めぐみ（国文学科4年） || 文・写真  
崎田史浩（社会学科4年） || 写真



10:30 富士吉田市の自宅前出発

12:00 てんせいや



昼食タイム。吉田のうどんを食べる。1時間半歩いて食べるうどんはいつも増して美味しかった

内宮 外宮



13:35

歩きはじめて3時間。富士吉田市を抜けて西桂町へ

13:00 大神社

国道139号線入り口、左右にわかれて鎮座する大神社。なぜわかれているのかずっと不思議に思っていた。元々は小高い丘に立つ一つの神社であったようだ。それが国道を造るときに内宮と外宮に分断され、祀られるようになった



春の暖かさを感じる2月4日、いよいよ出発の日。午前10時30分、編集部の仲間と富士吉田市にあるわたしの自宅を出発した。少し雲が多いが、穏やかに晴れていて、絶好の散歩日和。これから15kmもの道のりを歩ききることができるとか、少し不安な気持ちでいたが、ふだんとは違う通学にとってもわくわくしていた。

富士山を背に富士見バイパスを下り、国道をひたすらまっすぐに歩いていく。みんなと歩いていると、4年間通った道がどこか別の道に見えた。西桂町に入る直前の下り坂では、車内からだとすぐ近くに住宅が迫っており、圧迫されているような感じがある。しかし、歩くと道の左右の奥行が感じられ、思いのほか遠くまでまちが続いていることに気づく。西桂町に入り少し進むと、国道からわかれた細い道のさきに諏訪八幡神社がある。国道から見ると古びた家屋のようだが、正面にまわってみると立派な神社で、眼下には西桂のまちがひろがっていた。

正門のほうに降りて少し歩いてみると、レトロなレンガ造りの建物が現れた。興味を引かれ、隣接しているお店のかたにお話を伺っ



### 13:50 榎田商店

写真右/榎田商店横のレンガづくりの壁。少し色褪せていて歴史を感じさせる。写真左/お店に並べられていた色とりどりの傘。1つひとつ模様が異なり、色も鮮やかだが落ち着きがあつて上品な印象を受ける

### 13:45 諏訪八幡神社

国道から見ると背面しか見えなくて(写真左)、なんだろう、と石段を上って正面に回ってみると、眼下には西桂の町が広がっていた。ああ、西桂ってこんなに広いんだ。はじめて見る景色に感動した。この神社は諏訪八幡神社といい、日本武尊が東国開拓と国家鎮護のために諏訪神社を祀ったのがはじまりとされる。写真右は正門から見たもの



### 17:30 都留文科大学到着



総距離…15km  
かかった時間…約7時間  
高低差…約200m  
虹を見た回数…4回

### 14:45 カフェ アルバム

コーヒーとケーキをいただいて少し休憩。居心地がよく、気がついたら2時間も経っていた



14:40

ようやく都留市へ。もう少しだね、と励ましあいながら大学を目指す

てみると、昔は着物や米を保存しておく倉であつたが、現在はお店の倉庫になつていふ。そのお店「榎田商店」は洋傘の専門店、店内にはそれぞれ模様の違う、渋い緑や明るい黄色など美しく染められた色の傘がたくさん並んでいる。いつもの道から少し踏み込めば新しい出会いがあり、知つたつもりでいたのは国道に面したほんの一部分にすぎなかつたことを実感した。

歩きはじめて7時間、ようやく大学にたどり着いた。旅を終え、不思議とそれほど疲れはなく、歩ききることのできた達成感に満ちていた。4年間通い続けた道は一本道だと思つてた。しかし、歩いてみるとそこからさらに道がわかれてつながり、まちが広がっていることが見えてきた。いつもなら一瞬で通り過ぎてしまう景色だけど、時間をかけて歩くと、脇道が思いがけないところにつながつていたり、川の流れが意外と速かつたり、ふだん見えないものに気づく。

車内にはは出会うことのなかつたであろう景色や人。自分の足で歩いたからこそ得ることのできたこの旅の経験はずつと忘れなない。また新しい出会いを求めて好奇心のおもむくままこの町を歩いてみたい。

# 読者交流会

—読み手・書き手の視点から見えるもの—



2012年春、『フィールド・ノート』は創刊10周年を迎えました。10年の歩みのなかで私たちが大切にしてきたことはなにか。そしてこの先、大切にしていきたいこととは。

最終回は、昨年3月に続き二回目となる「読者交流会」を企画。ふだんあまり触れることのできない読み手の視点から、今後の活動に活かしていきたいヒントが見えてきました。



## 今

回のゲストは、本学社会学科教員の田中夏子さん(52)。長年にわたって『フィールド・ノート』を愛読していたでいる読者の一人です。5周年・7周年企画で寄稿をいただいている田中さんは、本誌をどう読んでいらっしゃるのか。10周年を機にお話を伺います。

## 都留を知るための「教科書」

◆はじめに、本誌と出会ったときの印象などをお聞かせください。

最初私がおこ(本学)に来たのが、ちょうど10年前の春でした。自分が働く場がどういう空間構造になっているのか、そこで人が何をしているか、ということに関心があったので、これ(本誌)を見たとき、人のこと、自然のこと、人と自然の関わりが細やかに書かれてあって、大きな衝撃を受けました。まずは私が都留を知るための「教科書」として読ませていただいたのが、最初の出会いです。私(本誌を)教科書として、都留歩きテキストとして手にしたので、新入生が入ってきたとき、ここにある情報を提供して、

そこから都留のことを勉強したらよいのではないか、最初はそう思いました。

その後どうなったか。さっそく授業にも使わせてもらいました。「フィールド体験」という科目(課外授業)がありまして、都留市を巡るわけです。50号なんかは自分がイメーajして「初めて来た学生たちが都留と出会う教材」がすごく豊かにあると思いました。だけどそれは、正しい『フィールド・ノート』の使い方なのか疑問をもつようになりました。予備知識をみんなで共有するっていう使い方では、『フィールド・ノート』を理解した使い方ではないかな、と思うようになりました。これは情報誌ではないな、と。

情報誌だったら知識として、前もって、ということではないと思うんですけども、自分とある対象——たとえば都留だったら水でもいいし、田んぼでもいいし、ワサビでもいいし、田んぼやワサビのそばにある石垣でもいいんですけど——その出会いついていうのは、誰かが説明してくれることによって代替できるものではない、ということ。皆さん(編集部員)の先輩がたが一から取材をして、感じ



『フィールド・ノート』50号 / 2007年6月21日発行

特集1 「つる発、水だより」・特集2 「5周年、迎えました」

水車の記憶を始め、水辺の生きものや、生活に欠かせない上下水道などを取材

たことを書き留めた。(それと) 同じことをやらないと、ここに書かれたことと対話ができない。だから、ちよつと不効率だけど、同じこと、あるいは類似したことを発見し直して始めて『フィールド・ノート』と対話ができるのではないかと思います。

もちろん、情報としても充実していると思うんです。けれども、ここに何があります、誰がいます、ということよりも、自然だとか人びとと出会った皆さんが、何を感じたかということと、その感じ方が私と同じなのかずれてるのか、そこに興味の焦点が移っていった、広がっていったということですね。それが今の読み方ですかね。

### プロセスを読んでいる

◆ 関心をもった記事や、とくに注目しているところはありますか？

一人ひとりの書き手が、自分の個性を出しながら無理に一般化しないで書いてるなって感じがします。プロセスが見えるものは、自分はどうか、ということを引き比べて読



聞き手・牛丸景太



司会・嶋田史浩



ゲスト・田中夏子さん



聞き手・大澤かおり



聞き手・藤森美紀

### 時代の変化、

書き手の変化、

それを取り巻く地域の

変化も見えてくれば

素晴らしいですよ。

### 蓄積を示す必要は

あると思うんです。



撮影・深澤加奈

めるのでおもしろいですね。読者が自分の感じ方と皆さんの感じ方を比較して楽しむっていうことですね。たとえば、西(教生)さんの記事をいつも見えててすごい感心するんだけど、私自身、鳥は鳥としか認識できなくて、なかなか西さんの認識の高みに一緒に立てないのが残念だな、と。でも梅が華や季節になつて、(69号にあつた)梅のあいだからジツとこちらを見つめるメジロの写真を出して、今年からは梅だけでなくそこに集う鳥にも目を凝らそう……とかそういう感じ方もあるわけなんです。

「きのこの記事」(次頁参照)なんかを読んでも、ふとした疑問がそのままほったらかしにされないで、ちゃんとある程度それを解こうとしますよね。でも分かんないことも残っちゃう。そのダイナミズムという大袈裟ですけど、「分かんない」「それをもう少し何とかしたい」「ここまで分かったけど、これだけ積み残し」っていうそれだけで物語じゃないですか。その小さい物語がたくさんつまんで、そこにどうしても目が行く。それは一見、情報提供なのかもしれないけど、どこか



### 「秋の山を歩く—きのこのから知る山のようす—」

『フィールド・ノート』75号掲載／2012年12月28日発行

前頁で触れた「きのこの記事」。交流会では田中さんからの問いに答え、執筆者の藤森さんが、取材動機や執筆を通して感じた自身の変化などをお話しました

にそういうプロセスとか物語とかが読み取れるところが魅力だなと思います。

決してプロが自然観察をした答え、アウトプットだけを読んでるわけじゃないですね。最初は私と同じだと思っんです。そこから「どう見えるようになっていくか」を、読もうという気になるわけです。

### 田中さんの「まとめ」の読み方

◆特集を組むさい、「まとめ」(特集を終えて)を考えていますか、どう読んでいますか？

皆さん「まとめ」って言いますけど、私はこれを読んでから(記事を)読み始める。「まとめ」じゃなくて、いつも「意気込み」みたいに捉えて、「まとめ」とするのは無理だと思っんですよ。ここからこぼれるものも相当ある。これを読んで、皆さんがこういうふうに入っって行っったんだ、じゃあ読もうっってなるでしょう。読者にとっっては「まとめ」じゃないっんですよね。

皆さんの「まとめ」が読者の始まりになるっというか、読者に渡っしてくれるバトンのような存在。読者はそれを受け取っって読むっってこ

とだと思っんですね。読者のまとめは、読者が——書かないまでも——して、次の自分の生活のなかに落っとしていく。そういう意味でどの時点でも「まとめ」じゃないけど、皆さんはとりあえずここでバトンを置く。編集者としての「まとめ」と読み手としての「まとめ」はずれるし、この世界で完結させることにこだわらなくていいんじゃないか、という意味で「まとめ」じゃないと言っったっんですね。

### 蓄積と、自分を知る回路

◆今後、本誌に期待することがありましたら教えてください。

蓄積されたものを横につないでもらいたいな、っっていうのがあります。『フィールド・ノート』のなかでかなり蓄積されてるもの、たとえば織物なら織物で(何度も)出てきたりしますよね。そういうテーマ別に通っして読んでみたいな。

木のこともそうですし、農業はもちろんですし、テーマごとに通っして読んだとき、どういっう世界が見えてくるのかっっていう興味はあります。期待することですね。同じかた

が何回も同じことを取り挙げられるなかで、そのかたの「変化」だとか、あるいは逆に変わらないことだとかを拾えるのは面白いし、実験的にひとつやっってみると良いかもしれませぬね。時代の変化、書き手の変化、それを取り巻く地域の変化も見えてくれれば素晴らしいっですよ。蓄積を示す必要はあると思っんです。

それから、突飛に思われるかもしれませんが、原発の問題を皆さんがどう捉えているのかっなっつてのがずっつと気になっつて。これだけ自然や土と最前線であつていっるなかで考えないわけがないのに、あんまり出てこないっですよ。戸惑いはあるわけでしょう？ その戸惑いの表明までは許されるんじゃないっんですか。そういう書き方に期待しますね。

書きたいけど抑制していっるんだとすれば、一回その抑制を解いてみたらどうかな、っつこと。書きたくないと思っつていっるんだとすれば、なぜそうなのかも聞いてみたい。戸惑っつてしまっうのはなぜなのだろう、っつていっうのは自分を知るひとつの回路だと思っいます。

## たしかな土台のうえに立って——

### 交流会を終えて

今後、私たちが活動していくうえでのヒントを得たい。それが読者交流会の大きな目標でした。ゲストの田中夏子さんには、一読者としての冊子の読み方や率直な感想、バックナンバーの活かし方など、いくつかの手がかりを与えていただきました。

また、書き手としての姿勢や考え方についても示唆をいただいています。私たちは日ごろから自分の好きなこと、興味関心のあることに主眼をおいて活動してきましたが、その反対のことを考える機会はほとんどなかったように思います。書きたいこと、書くのにためらいのあること、この両面から自身を振り返り、書き手として何を伝えていきたいのかを自身に問う。そうした課題も見えた交流会となりました。

読者交流会を受けて  
4回の連載を終えて  
いま、思うこと



2013年2月11日 第2回読者交流会

お気に入りの記事は「センサーカメラが写した動物たち」だという田中さん。当日はお手製の大豆料理を差し入れてくださいました

### さいごに

4回にわたってお届けしてきた10周年企画はこれにて完結です。発刊以来、編集に携わってきた先輩たちはどんな思いで活動してきたのか。そこにはどんな思想が反映されたのか。冊子はどんな変遷を遂げてきたのか。これまでの歩みをたどるなかで、私たちはそのつど自らの足元を確かめてきました。

本企画を通して確認した土台は、さまざまな人の手によって作りあげられたものでした。ここを立脚点にすることは、決して10年の蓄積に安住することではありません。私たちはたしかな土台のうえに立ち、見えてきた課題に取り組みながら、これからも見聞きし考え、そして記録・発信することに挑戦していきます。

地域のかたや読者のみなさまを始め、本誌につながる多くの方々の存在を実感することができたのも、この企画の一つの成果です。これまで本誌をあたたく応援して下さった皆さまにあらためて感謝申し上げます。今後の『フィールド・ノート』の成長に、どうぞご期待ください。



2012年10月28日 OG・OBとの座談会  
JR新宿駅で記念撮影。在学中からいつも取材する側だった先輩たち。ご自身が取材を受けることに新鮮さを感じたとおっしゃっていました

牛丸景太（国文学科3年）＝文



食事場を訪れるアカネズミ

## 待つことをとらえなおす経験

きっと近くにいるのだと思うけれど、簡単には目の前に姿を現さない野ネズミたち。印象的な食べ痕を発見してからというもの、彼らに出会う試みをしてきました。

狩野慶（ゆずりはら青少年自然の里）＝文・写真

昨年2月、特徴的な数十粒ものヤマザクラの実を発見しました。それぞれの丸い穴が開いています。それらはすべて、近くの炉のなかに置かれた鉄網の下に、蓄えられているかのように置かれています。そのわずかなすきまの高さは3cmほど。固い殻に器用に丸い穴をあけているこの食べ痕は、どうやらヒメネズミによるものようです。

7月上旬、夜は薄い上着1枚で快適に過ごせるようになったころ、ヒメネズミの食痕を見つけた場所にヒマワリの種を置き、センサーカメラを仕掛けてみます。3日後、センサーカメラには小さな身体を巧みにつかって炉のなかを行き来する野ネズミの姿（このときはアカネズミでした）がとらえられていました。栗色のつややかな毛や、黒くて丸い大きな目、それに鉄網のあいだからヒョイと顔を出す姿などはとても愛らしく見えます。本当に近くに暮らしているのだということが分かると、今度はどうすればじつさいに見ることができらるだろうか

とワクワクしてきました。

### 待つことは難しい

ヤマザクラの食痕を見つけた炉の隣りに、木の箱を設けて、野ネズミが身を隠せて安心できる簡単な食事場をつくることにしました。大きさはティッシュペーパーの箱くらいで、底には直径5cmの丸い穴が開いています。箱のなかにはヒマワリの種を置き、箱と地面の間には7cmほどのすきまをつくりました。とりあえずセンサーカメラのみ設置して、彼らのようすをうかがってみることにします。

その日の21時20分過ぎには、食事場を訪れる1匹のアカネズミの姿をカメラはとらえていました。その次の日も、種を置くとアカネズミは食事をしました。エサを見つけた場所には、毎日、姿を見せるようです。

7月19日、いよいよ観察を試みます。今までのセンサーカメラの記録を参考に、22時から23時までのあいだに、食事場から2mほどの距離にイスを置

き、頬杖をつきながら気ながに待つことにします。

地面の枝が誰かに踏まれて折れたような乾いた音や、木の葉が枝に当たったりながら落ちゆく音が想像力を働かせ、単調な時間に彩りを加えます。また、時間が経つにつれて暗闇に目も慣れてきて、あたりのようすが少しつかめるようになります。草をかすかに揺らしながらチラチラと小さな影を見せるカマドウマを野ネズミと勘違いして、何度がつかりたでしょうか。彼らも野ネズミの食事場の何かに誘われて、木



ヒメネズミによるヤマザクラの実の食痕

箱に3匹ほど集まってきました。けっきょくこの日、野ネズミを観察する初めての試みはうまくいきませんでした。

次の日、センサーカメラの記録を見てもみると、観察を諦めたおよそ20分後にアカネズミが食事場を訪れていました。そのあとセンサーカメラでの記録と、夜の森のなかでの観察の試みを重ねていくと、野ネズミはヒマワリの種を食べに毎日欠かさず食事場を訪れているのですが、僕がイスに座って観察を試みている時間帯は姿を見せないことが分かってきました。じつと動かずに待っているつもりでも、少し動いたときの服が擦れる音とか、顔がちよつとかゆくなつてポリポリかいている音とかが影響しているのでしょうか。原因を考えてみればみるほど、ささいなことが気になつてきて、きりがありません。じつと待っているつもりでも、どこからかこちらを探っているアカネズミの目には、脅威の対象として映っているのでしょうか。

## すつきりしない出会い

8月10日20時、近くの屋内から観察を試みます。窓を隔てて、食事場までの距離はおよそ7mほどです。赤いセロハンを貼ったライトで照らします。

20時32分、その赤い光のなかに一匹のアカネズミが手前から入ってきてました。一度、食事場の木箱の後ろに隠れた。なかに入りヒマワリの種を食べました。もつと近くで見たくてこちらが動いても慌てるそぶりは見せません。20分ほど食事をしたのち、奥に広がる森のなかへと姿を消しました。

8月20日、同じ屋内から観察を試みたところ、今度は窓ガラスを挟んだ縁側においた木の箱に、いつの間にか身を置いてヒマワリの種を食べるアカネズミを観察することができました。ちょうど21時頃になろうかというところです。

この時は、キャンプに来た地域の

小学生15名ほどと、木の床をギンギンと音をたてて寝そべりながらアカネズミを待つていました。アカネズミと子どもたちの距離は、窓ガラスを挟んでいるとはいえ、30cmほど。ひとめ見るのに苦労したアカネズミがなぜ、この時はこうも間近に姿を見せたのか。いまだに解けぬ謎となっています。

## 意外と大胆

2月中旬、観察を試みた同じ屋内に置かれたアクリル箱に野ネズミが訪れることのできるエンカウンタースペース（出会いの場）をつくりました。一本のパイプでアクリル箱と屋外はつながられています。アクリル箱の大きさは野外で用いた木の箱と同じくらいです。高さは1cmほど高くなりました。

ちよつと立ち上がって手を伸ばせば、天井に手が届く狭さのこの空間は、野ネズミも気に入ったようです。あるアカネズミは、パイプから顔をだして一瞬とまるようなしぐさを見せたあ

と、ゆつくりと身を乗り出し、こちらに丸い背を向けて食事を始めました。まるでここが慣れ親しんだ場所であるかのような落ち着きです。糞をしながらヒマワリの種を食べています。さらに顔ほどの大きさのオニグルミを持ち去るほどの大胆さです。時間をかけてオニグルミに穴をあけてみせるほどの余裕はまだない、というところさえかたもできそうです。

また、こちらが少し動いてしまうと外への出口となるパイプに急いで両手をか



屋外と屋内をパイプでつないだエンカウンタースペース

け、いつでも逃げるのできる姿勢をとります。耳を動かしながらようすをうかがい、その後、音がしたほうにからだを向けて食事を再開しました。

## こまやかに見ている

冬、餌台にやってくるヤマガラは、窓を介していれば人間が50cmほどの距離にいても安心してヒマワリの種を食べています。アカネズミと同じような「ここまでなら大丈夫」という「賢さ」ともいえるようなふるまいです。アカネズミとともに、このヤマガラも気になるようになりました。手にヒマワリの種を置いてじつと待つてみるとヤマガラはどう応えるか、ふと試してみました。

12月26日、なるべくヤマガラと目を合わせないように、気をつけながら待ちました。顔を上げなくても、近くであたりをうかがうヤマガラが近づいてくるようすは、その羽の音から知ることがができます。スズメほどの大きさの小鳥であっても、力強く低い羽の音

がだんだんと近づいてくるのは迫力が  
あります。その音を手がかりに、今は  
何羽のヤマガラがどのくらいの距離  
の、どのくらいの高さにいるのか想像  
するのは楽しいものです。30分ほど  
待ったのち、1羽のヤマガラが手のひ  
らにとまり、種をひとつ持つていきま  
した。ひと指し指に残る、ヤマガラの  
足の爪のチクツとした感触がたしかに  
本当の出来事であったことを伝えま  
す。工夫して待つことができたおかげ  
で、身近な自然に隠された新たな交流  
の糸口を発見したようで嬉しくなりま  
した。

目を重ねるうちに見えてくる個体  
差も興味深く感じます。いつまでも  
「ジージー」と鳴いて、警戒して  
いるのか寄つてこない個体もいれば、  
手のひらに置かれた種をくちばしで  
地面に落としながら、実の詰まった  
良質な種を選び取る余裕さえ見せる  
個体もいます。

あるヤマガラは、遠くの木立のあい  
だを勢いよくとおり、手に置かれたヒ

マワリの種を目がけて一直線に飛んで  
きました。そのさいに、こちらが思わ  
ず視線を動かしてしまっただけで、そ  
のヤマガラは手にとまる寸前に身をひ  
るがえし逃げていきました。こちらの  
わずかな瞳の動きさえも、注意深く見  
ているということでしょう。

今回の経験は、ひたすら待つことか  
ら始まりました。その「待つ」という  
姿勢はどうあるべきか。アカネズミや  
ヤマガラから少しずつ学んでいること  
ろです。その先にうつすらと見えてき  
たことは、彼らは想像以上に、こまか  
く厳格に人間を見ているのだろうとい  
うことです。

そのため、こちらは相手がとらえて  
いる世界に身を寄せるよう努めなくて  
は、と感じています。待つことは、彼  
ら小さな生きものに、その限りのない  
努力をわずかながらでも伝えることの  
できる手だてのひとつなのです。



手のひらに置いたヒマワリの種をとるヤマガラ

# 歩数から 見えるもの

1,484,290。

これは私が今年の4月の頭から

1月末までに歩いた歩数だ。

この数字から見えること。

変化したことと、これからと。

歩数を通して考えてみた。



## 歩

数は何の気なしにスマートフォン  
万歩計の機能でずっと記録し続けて

いた。換算すると、一日約5000歩弱。外出時にしか身に着けていないから、アパートにいるときやアルバイトの時間の分を足すともう少し増えるだろう。平均的な歩数よりはだいぶ低いとしても(20歳以上の女性の全国平均は6437歩。「平成23年国民健康・栄養調査結果の概要」厚生労働省)、都留に来る以前よりは格段に多く歩いている。無意識であつても積み重ねてきたこの大きな数字を見ると、おもわずほくそ笑んでしまう。けれど、どうして前よりも歩くようになったのだろう。都留に来てからの、歩いたことを振り返ってみた。

## 雪を歩く

1月15日、雪の降った翌日のこと。山梨県笛吹市出身の私にとって、膝ほどの高さまで積もった雪を踏みしめて歩いたのは生まれて初めてのことだった。一歩進むごとに雪が靴にまとわりつき、足を踏み出すにも雪から引き抜くにも、普通に歩くのに比べて何倍もの体力を使う。それでもその苦勞

自体や雪特有の踏みしめた時の音が新鮮で、楽しくもあつた。

その雪が降った数日後、夜遅くに大学からアパートまで帰った。都留は星がきれいだとは聞いていたけれども、じつさいに見上げてみるとそれはもう格別で、夜でもアパートや街灯の明かりの多いときには見られない無数の星におもわず見とれてしまう。雪が溶けはじめの時期で路面は滑りやすい。そうは分かっているとも、顔を下げられない。空気が澄んでいるとはこういうことなのかと実感した。寒くて全身が冷え切っていたけれど、ゆつくりゆつくりと星を眺めながら歩き、いつもの倍近くの時間をかけてアパートに着いた。

## 山を歩く

編集部先輩たちに連れられ、いろいろな生きものを探すために山や川に足を運んだこともある。

昨年の12月9日には、サンショウウオとの出会いを求めて沢に行った。本学から車で20分ほどのところにある細野川から、その上流の沢に着くまでには、山の小さな斜面を慎重に上り下りしたり、草をかき分けて進んだり



(2013.2.23)  
 細野川上流の沢への道。日当りのよいところはほぼ溶けきっていたが、日中も木の陰になりやすいところには雪がずいぶん残っていた。



(2013.2.13)  
 中屋敷フィールドへ下っていく坂道。数字と同じように、足跡の一つひとつも自分の歩みが目に見える形になったものだ。



(2013.1.22)  
 アパート前の道路。降ったばかりのときとは違って、雪の表面が固まっていた。踏み出した足が埋まるまでに時間がかかり、降りたての雪とは違ったザクザクとした感触が面白い。

した。まさに土、といった匂いが辺り一帯に満ち満ちていたのが印象深い。石や堆積している落ち葉で足元は不安定だけれど、足元を見ているだけでは駄目だ。あらゆる方向から生えている蔓や枝が服に引っかかるように、いろいろなところに目を向けて注意していなければならぬ。

結局、その日サンショウウオは見つからなかった。それでも歩いたことによる気だるさの残る充足感のほうが勝り、サンショウウオが見つからなかった残念な気持ちを吹き飛ばした気がする。

### 過程から楽しみへ

歩くといっても、ただコンクリートに舗装された道を進むということだけではないのだ。

高校生のころの通学は自転車で、歩くということはほとんどなかった。何かに目を奪われながらゆっくり歩くことも、そこに新鮮さや楽しみを見出すこともなかった。私にとつて歩くことは、目的地にたどり着くための手段でしかなく、ただの過程だったのだ。けれど、都留に来てからその考えは変わりはじめ

た。時間があるときにはゆっくり歩き、前方以外にも目を向ける。見るべきところは上下左右たくさんある。歩く楽しさに気づいたきっかけは、高校生のころには歩いたことのないようなところを歩いたことから。まったく同じ時間にまったく同じ場所を歩くということはない。いろいろな変化に気づく場であり、毎回がそのチャンスなのだ。今まではずっとその機会を逃していたのかもしれない。そう思うと悔しい気持ちが出つつも、ただの過程ではないこと自体を見つけたことが嬉しくもあるのだ。これからはこの気づきを活かさない手はない。

歩く楽しみを感じ取れるようになったから無意識に歩数が増えたのではないだろうか。いままでの万歩計の記録にはその変化した自分が凝縮されている。「万歩」にはまだまだ遠いけれど、自分なりにもっと歩いていきたい。だからといって無理矢理に歩数を伸ばさうとするのではない。歩数や意識の変化をじっくりと見ていきたい。楽しみに気づいたからこそ、これからまた変わるものがあるのではないかと期待している。



1月15日

雪が降った翌日に砂田くんと楽山公園へ。松の種や桜の芽の殻など雪の後に散ったものがよくわかる。

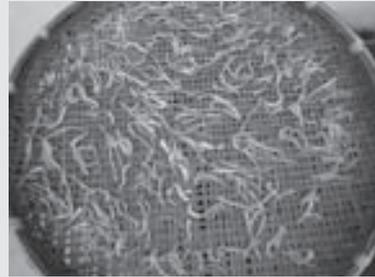
**小** 正月になると「飾り」が気になって見に行く（「飾り」については本誌72号をご覧ください）。いつも見ているのは十日市場のガソリンスタンド前と小篠神社前広場の二カ所だが、今年は少し違うものに出会った。2月4日、小佐野さんの通学路を歩いたときは（22頁「通学路を歩く」）、富士吉田で道祖神のそばに、先日まで「飾り」が立っていたという跡を見た。この前日には山中湖で、民家の庭先に七夕飾りのような笹飾りが立ってあるのをいくつか見た。時期が遅いがこれも「飾り」だろうか。少し足をのばせば、まだまだ知らない「飾り」に出会えそうだ。



1月13日

十日市場のガソリンスタンド前の「飾り」

1月16日～1月30日



**中** 屋敷の畑（12頁「小さな畑から」）で採れた大根を持田さんと刻んで箆に干す。2週間ほど干してカラカラになった。

1月30日

**フ** ヲシヤクを探しに鈴木さんについて自然科学棟の外階段を見に行く。フオシヤクは見つからなかったが、白くでこぼこした壁をじっくりみると、ちいさな生きものの集落があるのがわかる。まるく生えたこけ（写真）や、柔らかな毛に包まれたガの卵、すべて孵化した後の虫の卵塊、越冬中のでんとう虫（18頁「はるちゃんの都留生きもの図鑑」）。ふだん一人では通りすぎてしまうが、二人で向かうといういろいろなものが見えてきた。



## ひろいもの 番外編

見つけたものを誰かに伝えたい。それがひろいものきっかけです。今回は、編集部をつなぐりのなかで、いろいろな人に見せてもらっているものことです。

香西恵（社会学科4年）＝文・写真

2月19日



西さんに教えていただいて、ツグミの仮剥製をつくる。これまで鳥の死体を見つけても、どうしたらいいかわからなかった。ひとつ方法を知ること、違う付き合いかたができるかもしれない。剥製が出来た後は、何を食べているのか、砂肝のなかみを見た。砂はほとんどなく、木の実がぎっしり入っていた。赤くてこの大きさだとガマズミだろうか。洗って調べてみることにする。

3月2日 富士みち探訪

都留市護国神社から長安寺までを歩く。護国神社では郷土研究会の方々の戦時中の記憶に聞き入る。桜の木を抜根して畑にしたこと、壮行会でうたった歌のこと。商家資料館では養蚕にまつわる資料が興味深い。都留市文化会館近くの「大手」では、お話を聞いて、お城に続く桜並木や往時の街並を思い浮かべる。

2月16日

**養** 蚕についてのお話を崎田くんと聞きに行く。編集部に入ったばかりのころ、養蚕の先生にお話を聞いたことがあった。今回は戸沢で暮らしてきたおばあさんの、人生の節々の思い出とともにある養蚕と織物の記憶を聞くことができた（20頁「おしらさん」）。お蚕さんは子どもの仕事だったこと。余った布でひいばあちゃんが元旦に着る着物をぬってくれたこと。この日にもらえるみかんが楽しみで、たもとに入れて持ち帰ったこと。おしらさんのお祭りには笛や太鼓をならし、お寿司を用意して山へ上っていったこと。小正月には、「ダンゴバラノキ」に「縁起」と呼ぶお菓子を吊るし、まゆだんごとみかんをさしたこと。



2月23日

編集部に行く途中でキジを見る。

2月25日

**甲** 斐絹の見学に行く。編集部でお世話になっている本学印刷室の前田太二さんの企画に混ぜていただいて富士吉田技術センターへ。見せていただいた明治期の甲斐絹からは、織物としての技術の高さ、昔の人の教養の高さと遊び心のあるセンスのよさに圧倒された。その後、甲斐絹が扱われている文学作品を読む会にも参加させていただき、甲斐絹のなかの文学、文学のなかの甲斐絹という視点を垣間見た。



編集部にいると、いろいろな人がいろいろなことを見せてくれます。関心のあることにつられて出かけて行きますが、そこからいつも、これまでの自分の知らない、日々の楽しみかたを教わります。

富士みち探訪は、郷土研究会のかたがたのお話が楽しみで、毎回参加させていただいてきました。今回は、安富<sup>やすとみ</sup>一夫<sup>かずお</sup>さんに道中の芭蕉の句碑にまつわって、「俳句のつくりかた」の資料をいただきました。

資料に書かれているように、『俳句歳時記』を手元において使えば、安富さんのお話もつとよくわかるかもしれない。そんな期待をきっかけに、さまざまな興味が広がっていきます。

# バス という 場所



大澤かおり（社会学科4年）＝文・写真

都留市内を循環するバスを目にしたことはあるでしょうか。バスの運行は以前からありましたが、市内循環バスは2012年8月から始まりました。車とも電車とも違う存在からは、どんな景色が見えてくるのでしょうか。

2月20日、9時30分に「都留市立病院前」を出発する左回りのバスに乗ります。日曜日で病院も休みだから乗ってくる人もほぼいないだろう。そう思っていました。が、「都留市駅」で1人、「谷村高校前」で1人、と意外にも人は途絶えません。

大学周辺を回り、宮原へと向かうトンネルに差しかけたとき、バスは都留トンネルではなく鍛冶屋坂トンネルへと向かい、都留第一中学校の前を通り過ぎました。この道は信号もほとんどなく、家と家のあいだを縫うように敷かれた細い道で、すぐ隣の都留バイパスのほうがもつと道幅も広く走りやすそうです。なぜわざわざこんな道を……と考えていると、壮年の夫婦が乗ってきました。そこであつと気づきます。バスを利用する人のなかには、自宅からバス停まで辿り着くにも一苦労のかたもいるでしょう。対向車との行き交いにもひるむことのないバスは、利用者のためにこの細い道を走っているのです。

バスは戸沢へと向かう道を、エンジンを唸らせぐんぐん上っていきます。「芭蕉月待ちの湯」で何人が降りていったのを見届け、折り返して菅野川と併走するように下ります。

先ほどの夫婦は「赤坂」で降りていきました。富士急線に乗って遠出をするのでしょうか。それともお買い物？ 少しのあいだ一緒に乗り合わせただけの相手にも興味は尽きません。そんなことを考えていると、見覚えのある風景に戻ってきました。出発点である「都留市立病院前」をもう一度通過した後、終点の「都留市駅」で、ひとまずバスを降ります。1周1時間ほどの小旅行でした。

## バスに乗る人びと

2月5日、13時38分に「谷村町駅入口」を通過する左回りのバスに乗りました。平日のお昼すぎという時間帯のせいか、乗客は先日よりも控えめです。しばらく運転手と私だけ



バスの外観。市内循環バスは1乗車につき、200円。左回り、右回り各3便ずつ運行している



車内はきゆうくつさを感じさせない  
ゆったりとした空間になっている

の空間をたのしみます。静かだけれど静かすぎない穏やかな居心地と、バス特有の縦揺れがなんだか眠気を誘います。

すると、「産業短期大学前」で1人のおばあさんが乗ってきました。膨らんだエコバッグを腕から提げる姿は、一目で買い物帰りだとわかります。この荷物を持って家まで歩いて帰るのは無理だろうなあ。この人にとって循環バスは日常に浸透しているのだと感じます。「ビッグアイ前」に差しかかるうかというとき、おばあさんが運転手に「すみません」と声をかけました。整骨院の前で降りしてほ

しいと言うのです。運転手は戸惑うそぶりもなく、バスを道の端に寄せて一時停車し、おばあさんを降ろしました。乗客の数が少なかつたというのもあるのかもしれませんが、私にとつてはこういったやりとりが、循環バスをただの移動手段だけではないものになっているように思えました。「芭蕉月待ちの湯」をU

ターンして先ほど来た道を下っていく途中で、また1人乗ってきました。この人も背を屈めたおばあさんです。そのおばあさんより一回りか二回り年齢が下のように見える女性と犬が見送りに立っていました。また遊びに来てね、また来るよと会話をし、バスへと乗り込みます。ドアが閉まる瞬間までお互いに手を振っていました。この二人の関係は私にはわかりません。友人かも知れないし、親子なのかも知れません。想像をめぐらせているあいだ、もたもたしているとか、早くしてほしいとか、そういった気持ちはまったく湧いてきませんでした。

### バスがもたらす距離

循環バスに乗っていて気づいたのは、人と人との物理的な距離がとて近しいということ。くるりと辺りを見回せば、誰が何をしているのか容易にわかります。時には乗客の話し声が、心地よさのある音となつて耳に届きます。電車では富士急行線のような小さな路線でも2両はあるので、乗り合わせた人すべてに目を配ることは難しいでしょう。またバスのなかは、歩くのとも自家用車を

走らせるのとも違う時間の流れかたをします。歩いているときや自家用車を使っているときは、時間は自分のもとにあるような気がしますが、余裕のあるときは寄り道をしてみたり急いでいるときは近道をしたり、臨機応変です。けれど、バスに乗っているときの私は、自分の時間をほかの人や周りの環境にゆだね、バスの外の景色やバスのなかのようすに集中しているように思いました。

私はバスに乗っているあいだ、運転手やほかの乗客に話しかけたわけではなく、ただ空間をともにし、バスのなかの光景を眺めていました。そうして見つけたものは、出会いや交流という言葉すら大げさすぎるような、小さな小さな接点です。その接点と向き合っているうちに、利便性や速さではなく、移動手段そのものへの愛着がわいてくるのです。地域に深く根を下ろす循環バス。他人の存在が近くにあることをたしかに認識しながら、お互いに踏み込むことを強いるわけではなく、ゆるやかな空気がそこにはあります。あの空気を味わいたい。そんな思いが、また循環バスを利用しようという私の気持ちを後押しするのです。

# ギャラリー・喫茶

はなぶさ

## 英



「英」の入り口。木製の味のある看板が目にとまる

上谷の国道沿いを通るたびに、無意識に目に留まっていた緑色の「英」という文字。ある日、「英」とはどういう建物なのだろうと思い、初めて看板を注視して、英という文字の前に「ギャラリー・喫茶」とあることに気がついた。その時から、建物の両脇に置かれた達筆な手書きで「〇〇展」などと書かれた看板にも目がいくようになり、いつか入ってみようかな、と思うようになった。

平井のぞ実（英文学科4年）＝文・写真

### 「英」の第二印象

初めて「英」の館内に入ったのは半年以上前。「芸術にも今やつてる企画展にも詳しくないけど、入って大丈夫だろうか」と少し躊躇しながら入り口をぬけると、受付があった。受付のかたはお昼ご飯のさいちゅうだったようで、少し慌てながら、こんにちは、こんなところをお見せしてすみませんね、とはにかんでおっしゃり、私はその親しみやすい様子に緊張がほどけた。約90㎡の館内には、たくさんの静物画が、暖色の照明に照らされ、グレーの壁に展示されていた。

作品を見ているうち、何だか覚えのある薬品のような匂いがあることに気が付いた。館内の作品を一周して見て戻つてくると、受付のかたがいろいろと話し掛けて下さり、「英」について知る機会が得られた。その時分かつて驚いたことが二つある。一つは、「英」の2階が歯医者さんで、その院長さんである西村光太郎さん（61）がオーナーをなさっている、ということ。館内の懐かしい匂いの正体が判明してしっく

りきたと同時に、歯医者さんと画廊が一体化しているなんて、あまり見たことのない建物だな、と思った。もう一つは、私にとって文字というより、図として建物を象徴していた「英」の字は、「はなぶさ」という読みかたを持つていたことだ。2007年に「英」を開設された、オーナーの奥様の英子さんが自身の名前から名付けた、という由来も知ることができた。

入る前は、芸術品が展示してある場所、ということだけで、何となく格式高く近寄り難い感じがして、入るのは一度きりになるかもしれないと考えていた。しかし、帰り際には、学生さんが来ると嬉しいという受付のかたの言葉や、落ち着いた「英」の雰囲気の居心地のよさに、また来たいなという気持ちになった。

### 久しぶりに

二度目の入館を果たした、1月23日。この日は、「丸山東子展」の開催期間中であった。前回と同じように、館内を一周して作品を見て回ったのだが、以前と雰囲気が違う。半年前はすごく目立っていた館内を移

左:館内の中央にある照明。内科があった時に天窓だったものを改装し、おもむきのあるデザインになっている



右:水墨画を主に描かれる丸山東子さんの作品



動する自分の足音が、この日はほとんど聞こえない。お客さんが多かったのだ。偶然にも、展示物の作家さんである丸山東子さんがいらつしやっていた日で、ファンや親戚のかたも多く訪れている、とスタッフのかたが教えてくださった。珍しいことではあるが、たまにこういうにぎやかな日があるらしい。また、「英」は受付の傍に小さなカウンタがあり、喫茶もできる。ここに定期的に来てコーヒーを飲んでいく近所のおじいちゃんと世間話をするのが楽しい、と受付のかたはおつしやっていた。心地よい静けさに満ちた美術館らしさが「英」の特徴だと無意識に思っていたが、人々の交流を生むにぎやかな場でもあると知って、「英」の起源に関心が湧いた。そして、幸運にもこの日、オーナーの西村さんが館内にいらつしやり、お話をうかがう機会を頂くことができた。

### オーナーのお話

1月23日のお昼休み。「英」の館内中央にある円形テーブルに座り、西村さんにお話をうかがう。「英」は、今は亡くなられ

た西村さんの奥様英子さんの意向で、内科だった1階を画廊に改装して開設されたものだそう。2007年に開いて以降、受付の女性3人、書道家の杉本好文さん(64)を始めとする男性スタッフ数人、そして「私はちよつと手伝うだけ」とおつしやる西村さんご自身を加えた6、7人で運営なさっている。今まで展示してきたのは、世界に名の知れた作家の作品から、地域の主婦の美術サークルの展示物に至るまで、プロアマを問わず幅広い。

「英」に対しての想いや、願い。そういったことが知れたら、と思っていたのだが、それらの話題は西村さんを少し困らせてしまったようだった。お話を聞くなかで、うんと悩んだ後、苦笑いを添えて、はじめた本人がいれば一番いいんですが、という言葉が出てくる。英子さんに直接お話を聞くことができたなら、というその言葉への共感と、質問すること自体が適切じゃないのかも、という自省の気持ちが起こり、言葉が詰まる。こんなやりとりが少し続くと、西村さんが手に持っていたクリアファイルから紙を一枚取り出し、これにいろいろ書

いてあるので、と言って渡してくださった。2009年、英子さんがインタビューを受けたミニコミ誌『街かど情報TSURU』の2月号のコピーだ。目を通して分かったことは、英子さんが、セレンディビティー(偶然の出会いから生まれる新しい発見や幸せ、またそれらを見出す能力)という言葉を大切に、芸術と人との一期一会を生む場所を都留に作りたいと考え、「英」を開いたということ。また、その出会いが、忙しい日常を送る人々にひとときの休息を与え、心を潤すものであつて欲しい、と信じていることだった。

英子さんのアイディアで作られた館内、温和で説明熱心なスタッフさん、時おり起こるわいわいとした人々の談笑……。私が出会った「英」の姿は、英子さんの想いが、「英」に関わるあらゆるものに浸透していることを物語るものばかりだ。英子さんの想いに触れたことで、「英」を知ったことへのぼんやりとした感動だけでなく、その出会いの持つ力に目を向けることができた。「英」との出会いは、私にとってまさにセレンディビティーといえるのだ。



きれいに刈られた芝生  
人びとが入り出すドア  
毎日目にするキャンパスの景色。  
そんな、大学の「なんでもない」景色を  
つくっている人がいる。



## 大学のなんでも屋さん

「なんだ自転車なくしたのか？」

2年前の夏休み明けのこと。休み中、置きっぱなしにしていた自転車が見当たらない。鍵を片手に探しまわっていたら、作業服姿のおじさんが話しかけてきた。面識はないけれど何度か見かけたことのある、このおじさん。

「ちようど直したやつがあるから、それ、もつてくか」。それだけ言い残してくりりと背を向けると、すたすた、歩いて行ってしまった。「い、いいんですか？」慌てて後を追っていく。授業終わりの学生の波のなか、ずんぐりとした背中が妙に目立って見えた。

### 隠れ家

本学学生会館のななめ前、プレハブの2階に、中井洋さん(63)専用のオフィスがある。オフィスといっても、書類の山が眠そうにあくびをしているところじゃない。部屋に一步入れれば、金づちやペンチ、ドリルにスパナなど、棚にぎつしり詰まった工具たちが、にぎやかに出迎えてくれる。ガラス戸に

貼られた紙には「修理マニユアル――

本部棟1階トイレドア高さ」という走り書きのメモ。室内をぐるりと見渡すと、ペンキの缶が数十缶、大きな草刈り機3台、工事用のカラーコーンに灰皿スタンドなどなど、40畳ほどある部屋はすつかりモノで溢れてまるで隠れ家のような雰囲気だ。少しくたびれた面持ちの用具たちと一緒に居ると、自分にも居場所を与えられたような落ち着いた気分になる。自転車をもらって以来、大学での昼休みや授業の空き時間に、ふと足が向くようになった。中井さんの隠れ家は、いつのまにか私の隠れ家にもなっていた。

### 職業、「なんでも屋」



私は中井さんの肩書きを知らない。自称、「なんでも屋」。これが中井さんの職業だ。

びるるる……。お昼休みでも、甘えるように携帯電話が中井さんと呼ぶ。「トイレの排水管が詰まって、直して欲しい」「教室のドアの閉まりが悪い



◀隠れ家の机の上にある修理中の壁時計。  
「直す」ことが趣味でもあるのだ



みたい」「床のタイルが壊れてて危な  
くて……」「あちらこちらからオフア  
ーがかかる。おうちで電気関係の仕事  
をしている中井さんは工具の扱いも手馴  
れている。「ほかに誰もやらないから  
しようがない」。そう言つて手袋をは  
めて工具セットやコードをもって仕事  
に出ていく。

「あー疲れた疲れた、いやになつち  
やうよ」。そう言つて隠れ家に帰つて  
くるときもある。決して楽ではない体  
力勝負の仕事も多くこなしているから  
だ。なんでも屋さんの仕事は天候しだ  
いの自然との闘いでもある。夏は、う  
だるような暑さのもと朝から晩までキ  
ャンパス内の草刈りだ。本学の附属図  
書館横の土手から急な坂を上った弓道  
場のあたりまで、連日汗びつしよりに  
なるまで雑草とにらめっこする。冬に  
は雪かきが待っている。いかついサン  
グラスをかけて、ぴかぴかの赤い除雪  
機を操っている人を見かけたら、それ  
は間違いなく中井さんだ。  
なんでも直すし、なんでもやる。

これが自身を「なんでも屋」と語る  
所以なのだ。

### こまるなんでも屋さん

「クラブ棟のトイレ、行ったことあ  
るか？」ある日隠れ家にお邪魔する  
と、中井さんが尺取虫のような眉毛  
をさせて聞いてきた。どうやら大学  
の裏山にある学生用のクラブ棟のこ  
とらしい。「ひつどいよ、あそこは使  
いかたが本当にひどい」。水詰まりの  
修理のためにトイレにいったところ、  
あまりの汚さに修理の前に掃除をし  
なければならなかったという。

「人間は自分のモノだと大事に扱う  
のに、公共のモノだとどうしてこう  
も大事にしないんだらうなあ。なん  
だか悲しくなるよ」。つぶやく中井さ  
んの背景に、学生たちの行き交う姿  
が小さく揺れていた。



### 思いやりの仕事



中井さんと日々の仕事の会話を交  
わすようになって、雪のかかれたキ  
ャンパスや、修理された場所から、  
ふと中井さんの働きを想像している  
自分がいることに気づく。人が歩き  
やすいように、使いやすいうように、  
日々せっせと働くその姿。中井さん  
の仕事はそんな、人やモノを思いや  
る仕事だと思う。その働きを身近に  
感じることで、私にとって今まで無  
機質な空間であつた大学が、以前と  
違った質感を持つて接してくるよう  
になった。それはモノを思いやる以  
前の、モノの持つ弱さを知れたから  
かもしれない。

決して表立って見えては来ないけ  
れど、大学生活のなんでもない景色  
は、中井さんの働きによつて支えら  
れていた。

中井さん、なんでもない景色を、  
いつもありがとう。

山本由樹恵（社会学科3年） 〓文・写真

# 起すよがる朝

第6回

— 広がってゆくもの —

## 染

め物の話っていうけれど、私をはじめから染め物をね、しようとしたわけじゃないからね。着物のね、リフォームなんだけど。で、それを解いていると着物の裏って、こういうの「胴裏」っていうのね。で、こういうふうに（胴裏に広がった薄黄色の点々を示しながら）汚くなっちゃうの。これはね、もとは白いものなの。真っ白が古くなって年数がたつと、色が黄色くなったり、茶色いこういうシミが出たりするのね。だけど、この胴裏自体はね、正絹しょうけんなのよ、シルクなの。そうするとね、ふつうね「ああもうこれ、汚いから使えない」って捨ててしまったりするのね。だけど私はそんな無駄にしてはもったいないと思って、そしてなんか方法はないかなって、そしてこれを染めたらどうかなんて思ったの。それで一番先に染めたのは玉ねぎの皮。白いものでも玉ねぎの皮の色で染めると、たとえばこうゆう



机の上に広げられた色とりどりの布——。「ね、これ触ってみて。すごーくね、柔らかくてね、いい感じね、このシルクの感じが」。遠藤静江さん（80）の瞳がきらりと輝きます。今回は、遠藤さんが和服リフォームをきっかけに始めた「染色」についてのお話です。

ふうに襟の汚れている部分が多からなくなるんじゃない、おなじような色だから。

4年前に私の畑にね、これ（藍の種）を蒔いたの。そうしていっぱい出てきたのね。でもこの花を見るとタデ科みたいな感じ。で、この葉っぱをちようどね、7月の終わりから8月ね。ちようどいちばん威勢がいいとき。そんなとき葉っぱを摘んだの。はじめはね、水のなかに入れてね、夢中で揉んだの。そうして汁を出したの。それで染めたのよ。そしてらね「いやあ、こんなことする必要はないな」と思ったの。手で揉むつてもものすごく暇ひまがかかること。で、ミキサーにかけたの、お水入れて。そうしてその汁にこの白い布を入れたわけ。ほんとにこう、浸しただけ。（水色の染め物を広げつつ）そしたらこういう染めができたわけ。

こないだ（ミュージアム都留にて開かれた遠藤さ

んの個展『和服リフォーム展』。平成25年1月4日〜17日にかけて開催された）一着黄色いのであったで

しょ。あれは紅花でね、おとし紅花の種を貰ったから、畑に蒔いたの。で、うちの畑にぞーつとね、芽がいっぱい出てきたの。そしてたらどれが紅花なのかわからないの。それでね、おなじような芽があるから「これが紅花だろう」って思っただけを残して、あとみんな摘んじやつたの。そしたらその葉っぱが大きくなつたらば、うちの弟が見て「これ、ただの雑草だよ」って。そしてその年は失敗なの。それで去年2回目に種蒔いて、よく見たの。この前はこれが雑草だったから、今度こつちがそうなんだなって。それで去年は紅花が成功してね。で、ちよつと本読んだら、紅花も藍とおなじように、熱を加えて発酵させてしばらく置いて、つてね、難しいことが書いてあったの。それで私は、いや、そんな

タイトル下の写真は、遠藤さん宅に飾られている紅花のドライフラワー

## 静江さん流 染め物講座

玉ねぎの皮



赤シソの葉



紅花の花びら



藍の生染め



- ①材料を鍋で煮る
- ②材料を取り出し、煮汁に布を入れて、また少し煮る。沸騰した後、さらに15分ほど煮る
- ③媒染(色止め)のためにクエン酸あるいは酢を入れる。そのあと10分ほど置く
- ④煮汁から布を取り出して水洗いし、乾かす

▶玉ねぎは金茶色、赤シソは淡いピンク、紅花は赤みが強い黄色になる

- ①藍の葉を、水と一緒にミキサーに1分ほどかける
  - ②ボウルなどに汁を移し、そのなかに布を浸して10分ほど置く
  - ③汁から布を取り出して水洗いし、乾かす
- ▶出来上がりは水色になる

※材料・水の量は、静江さんの感覚で毎回決めているそうです。それによって色の濃淡も変わってきます。挑戦してみてくださいというかたは、その変化もぜひ楽しんでください

本格的なことになしなくてもね、草花は、自然のものは、煮ればどんなものでも汁が出るって。昔は染色がね、今みたいに化学染料がないときはみんな、もち草でもなんでも野にあるものが全部ね、染色の対象になってたから、紅花だってそんな難しいことしなくもいって思っ、花が出たら花びらを全部摘んだの。そしてその花びらをお鍋で煮たわけ。それに今までとおなじように染め物を入れて、そしてクエン酸を入れて仕上げたら、すつごく綺麗なあやう黄色が出たの。

だけど本当の紅花染めってのはね、朱色になるんだって。でも私は本格的じゃないから、ちよつと黄色の濃いようなね、オレンジ色になって。でも私はね、それで上等だって思ったの。それで汚れがわかんなくなるんだもの。それで「ああ、これで成功した」って思っ。

私、そうゆうふううにリフォームしながら、今年の『和服リフォーム展』のタイトルに「そだて 育てられて」って書いたけれど、何かしながらだんだん、そのやってることによつてその知恵を授かってくるのね。ね、次から次へと。物事ってのは行動を起こしていくと、その行動の先に知恵がついてきたり、生まれ



遠藤静江さん  
(えんどう・しずえ)

1932年11月23日生まれ。都留市在住。元小学校教員。現在は着物のリフォーム、染め物、油絵、都留詩友会での活動など、さまざまな取り組みをなさっている。写真は、ご自身で育てた藍に囲まれて(2011.10.10)

てきたりするのね。もつと「染め物」っていったらば、ほんとに専門的なね、染色やってる人もいるだろうけど、私がした染め物っていうのは、エコなものをね、再生しようと思つてした染め物なのよ。だからここにあって全部、藍で、玉ねぎで、紅花なのね。

やってみるとね、土をいたずらした労働つてもね、気持ちがいいよ。その思いが収穫につながるのね。布ばつか手で触っているけれど、土を触つて掘り起こしたり、蒔いたり。そうゆう作業もおもしろいよ。だから、一つのことをしようと思つて広がってゆくなっていうね。だんだんこう、広がりを持って発展していくつてのは、すごい楽しいことだと思ふのね。

イラストはすべて遠藤さんによるもの。背景は遠藤さんにいただいた藍染めの胸裏

## △ ササビ観察会

12月18日、都留文科大学附属小学校の4年生と保護者を対象に、ムササビ観察会をおこないました。スタッフとして編集部から6名が参加し、観察に関する諸注意や観察中の誘導、観察後にはムササビの生態についての解説を担当しました。午後5時ごろ、校舎の裏の林に設置された巣箱から、ムササビが出てくるのを待ちます。子どもたちは、ムササビを怯えさせないようにと声を出すのをこらえながら、滑空の瞬間の感動をかみしめているようでした。子どもたちと生きものとの出会いに立ち会うことができ、準備を重ねてきた甲斐があったと感じました。(大澤かおり)



ムササビの体の仕組みを解説する学生スタッフ

## 取材を受けました

1月29日、『山梨日日新聞』の取材を受けました。編集活動を通して学んだことや、10周年を迎えた今後の意気込みについてお話ししました。ふだん自分自身について語る機会の少ない私たちですが、自分たちの考えを口に出すことで、自分が、そして周りの編集部員がどんな思いでいるのかをあらためて確認できたと思います。また、こうやって取材を受けることで、自分たちの取材のしかたと照らし合わせて学ぶ点も多かったです。このようすは、1月31日付けの朝刊に掲載されました。(大澤かおり)



会議のようすも取材されました

## 駅の展示替え

2月10日、富士急行線 都留文科大学前駅の待合室の展示を貼り替えました。今回は過去の『フィールド・ノート』の記事をパネルにしたものから、10枚を選んで展示しています。自然を取り扱った記事、都留市の歴史や人について書かれた記事などを、それぞれの分野に分けて配置するなど工夫を凝らしました。駅へお立ち寄りのさいは、ぜひご覧ください。(海賀沙也佳)



色とりどりの記事がパネルとして展示されています

## 地域交流研究フォーラム

2月2日、本学にて地域交流研究センター主催の、地域交流研究フォーラムが開かれました。今回は「フィールド・ノート10周年からみえる未来」というテーマです。卒業生や市内外の読者とともに、編集部員がパネラーとして発言し、フォーラムに参加くださった地域のかたにも、ご意見をいただきました。

これまで毎号ごとに冊子に対する反省をすることはあっても、活動全体を客観的に振り返る時間はあまり設けてきませんでした。このフォーラムを通して、私たちと読者のかたがたとのあいだで『フィールド・ノート』に対する思いを共有することができました。編集部員の感想とともに、フォーラムのようすをご紹介します。

### パネラーの思いにふれて

編集部に入ってからまだ1年足らず。今回のフォーラムは、私自身が『フィールド・ノート』そのものをよく知り、考える機会となりました。

パネラーのかたがたのお話を聞き、10年という積み重ねがあつての今であること、また、

自身を『フィールド・ノート』ファンと称し、毎号楽しみにしてくださっている読者のかたがたがいることを知りました。『フィールド・ノート』がいろいろなかたの努力や支えのなかで作り上げられ、そして今も作られている、ずっしりとした重みのある冊子なのだということを実感しました。書き手の一人として、読者のかたの存在を意識しつつ、今まで以上に自分が納得できるものを書いていきたいと思えます。

(鈴木陽花)

### 展示物から見る10年の歩み

フォーラム会場には、現編集部員が選んだおすすめ記事のパネルや、0号から最新



7人のパネラーに『フィールド・ノート』を読んだり関わったりしての感想、これからに期待することについて発言をしてもらいました

号(75号)までの冊子、都留市内で作られてきたミニコミ誌などが展示されました。おすすめ記事のパネルは編集部員の手作りでです。パネルには小さな紹介メッセージも添え、記事のみどころをそれぞれアピールしました。

フォーラム開始前と途中休憩の間には、参加者のかたがたが展示物をしげしげと読んでいたり、じつさいに資料を手にとったりする姿が見られました。展示物について語り合う声も聞こえてきました。準備をした側の私たちも皆さんと一緒にあって展示物を眺め、視覚から10年の歩みを確かめることができました。

(深澤加奈)

今回のフォーラムのようすは、『地域交流センター通信』23号にも詳しく掲載されます。そちらもぜひご覧ください。



これまでの記事をパネルとして紹介

# FIELD NOTE

no.76 Mar.

発行人

北垣憲仁〔17〕

統括編集者

西教生〔17〕

編集長

香西恵〔34-35〕

牛丸景太〔24-27〕

前澤志依〔10-11〕

副編集長

深澤加奈〔42-43〕

編集

狩野慶〔28-31〕

大澤かおり〔36-37〕

小佐野めぐみ〔22-23〕

崎田史浩〔20-21〕

平井のぞ実〔38-39〕

藤森美紀〔6-7〕

持田睦乃〔12-15〕

鈴木陽花〔18-19〕

山本由樹恵〔40-41〕

海賀沙也佳〔2-3,46-47〕

別符沙都樹〔32-33〕

ロゴデザイン

工藤真純

10周年ロゴデザイン

石川あすか

〔 〕は編集担当ページ

FIELD・NOTE（フィールド・ノート）76号

発行日：2013年3月18日

発行部数：400部

発行・編集：

〒402-8555

山梨県都留市田原3-8-1

都留文科大学

コミュニケーションホール地下1階

地域交流研究センター

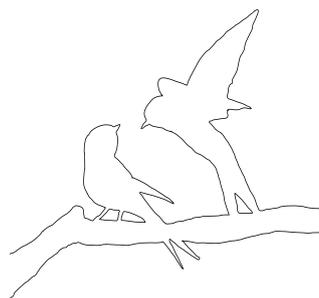
フィールド・ミュージアム部門

『フィールド・ノート』編集部

E-mail：field-1@tsuru.ac.jp

編集後記

あたらしい始まり



お年寄りのかたから古い話を聞くと、「なるほど」と深くうなずくことがしばしばあります。ご自身の昔話に絡めて、地域の歴史や移り変わりなどを滔々<sup>とうとう</sup>と語るさまは、地域の先生そのもの。都留にいと、そんな先生との出会いがたくさんありました。農業や富士道、神社仏閣、川、山……。来年度から新しい土地に移ります。次はどんな先生と出会えるのか。都留で学んだことは、これから先もずっと生かされていくことでしょう。

（崎田史浩）

やはり月日が流れるのはあつという間です。先日の編集会議では次号の特集について話し合いをしましたが、次号から携わらない私としては少しだけ複雑な気持ちでした。自分で自分に課した編集作業をやりとげた達成感と安堵、終わってしまう切なさ。大学生活とともに、編集部員としての私の活動は今号で終わりを迎えるのだと実感しました。でも、終わりは始まり。寂しいけれど、4年という時間のなかで手に入れたものをしっかりと両手で抱えて、新たな一步を踏み出します。みんなこうやって社会に飛び出していくのかな。

（藤森美紀）

➤ の時期に引越しの準備をしていると、4年前もこんな感じだったな、と入学する前の自分を思い出します。これは持って行こう。あれは必要な。向こうで物も増えるだろうな。荷作りは、花の種を土に埋めるかのような作業です。咲いた花の姿を想像するように、新天地に思いをさせながら、新しい始まりのための準備をします。地味で大変だけれど、どこかわくわくした気持ちで今日も段ボールの箱を積み上げるのです。

（大澤かおり）



次回予告

# 地図 (仮)

2013年6月発行予定

# FIELD·NOTE

no. 76



発行日 2013年3月18日 (年4回発行)

発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学 コミュニケーションホール地下1階  
地域交流研究センター フォーワード・ミュージアム部門『フォーワード・ノート』編集部